

「寄り道しないで帰るんだぞー」

担任の女教師の一言でHR（ホームルーム）が終了して、教室内が一気に慌ただしくなる。勢綱はスマホのロックを外して画面を覗きこむと、リリは机に体を預けて昼寝をしていた。登校している間はGPSによってアプリ内の場所も校内になるという、無駄な作りようだ。

呼びかけるかタッチで頭を撫でればリリは起きる。しかしその眠る姿がかわいいので、部屋に行つてからにしておこうと、勢綱はスマホをスリープ状態にして懐にしまった。

「砥水くん、この後みんなでアイス食べに行かない？ いいお店見つけたんだ」

帰り仕度をして教室から出ようとすると、壁際の席で砥水流河がクラスメイトの女の子二人に捕まっていた。毎度の光景だ。

「いやオレ、今日部活あるし……今度の土曜ならつき合うからさ、カンベンして」

「ほんと？ やったー☆」

遊びの約束を取り付けることができ、女子達は浮かれ気味だ。とは言え当日、彼女達は泣きを見ることになるだろうなど、勢綱は慮（おもんばか）る。

「モテモテだな砥水の奴。俺もあんなイケメンに生まれたかったなあ」

「王子様みたいな体型だしどこのアイドルグループの一員だっていうね」

「他のクラスの女子からも人気者だからな。昼休みにも女子一団に捕まって中庭に連れていかれてたぜ、一緒に昼ご飯食べようって」

と、説明セリフでクラスメイトの男子達が羨ましがるのも、テンプレートと化している。

それでも流河が男子連中から嫉妬されないのには、大きな理由があった。

「じゃあ、土曜日の一時過ぎにね。あつりりちゃん、ごめんねー待たせたー？」

女子三人と用件を話し終えた流河は、彼女達がまだその場から離れていないにも関わらず、懐からスマホを取り出して、早速AIアプリと会話し始める。

「んもー、りゅーちんってば待たせすぎ！」

「HR終わるまで我慢しなくちゃいけなかったからさ。前に話しこんでたら先生にスマホ没収されちゃったし」

「んもーわかってるけどさあ……あの時は大変だったねー」

「ごめんなりりちゃん、でも今日は放課後までこれからずーっと一緒だから♪」

「うん♪」

人目もはばからず、デレ顔全開で、AIアプリの中の人といちゃつきまくる砥水流河。

その光景を遠巻きに見ていた男子連中は、もちろんドン引きである。

しかしそんな直視するのもつらい行動も、爽やかなイケメンが周囲の目もお構いなしで、恥

ずかしがらずにしていれば、女子達はキヤアキヤア黄色い声を上げて騒ぐものだ。

「ほんとカワイイわ、流河くん……」

そこまで行くと、もはや病気じやないのと勢綱は内心でツッコむものの、表には出さない。

「いちやついてないで部活行くぞー、流河」

「はいよー」

放っておいたらスマホの電池が切れるまで、延々とA Iアプリとやり取りしてそうだったので、キリのいいタイミングで勢綱は流河に声をかけた。教室に残る女子達に手を振りながら退出する流河を見て、軽くため息をつく。

「あんまり安請け合いするなよ、あの子達ガツカリさせるだけだぞ」

「ちゃんとデートにはつき合うって。もちろんリリちゃんも一緒だけどな♪」

勢綱の助言にそう返事して、正面にかざしたスマホのリリと一緒に同じ決めポーズを見せ付けてくる流河。一体どれだけリリをセルフ改造したのかと、勢綱は呆れて肩をすくめる。

二人の教室から旧校舎にある部室まで歩いて十分くらいで、その合間にすれ違う多くの女子から、流河はバイバイと手を振られていた。途中ずっと、流河は手にしたスマホのリリと話している。その様子を横目で見ながら、勢綱も会話に加わるのが日常の光景になっていた。

「そっちのリリちゃんはまだ寝てる？」

「俺に似て寝起き起こすと機嫌悪いんだ」

「面倒ならそのリアクション外せばいいんじゃないかねーの？」

「二人みたいにいつでも喋っていられる方が驚きだよ。たまには一人の時間もいい」

「えー、リリちゃんと話してる方が絶対楽しいしー」

「わたしもりゅーちゃんと話してるの楽しい！」

隙有らばすぐにいちやいちやし出す二人。向こうのリリが言うように、勢綱のリリも設定変更して従順に馴致した方が最適なのもかもしれない。それでも適度に間隔を置いて、コミュニケーションを取るやり方が自分には合っていると考えていた。

同じA Iアプリがベースでも、それを使う人の性格によってA Iの性格も順応していく。

昔のA Iアプリだと、そこまで大きな差異を生み出すことはできずにいた。技術の進歩した今はもう当然のことで、セルフ改造によってさらに思い好みの性格を創り出すこともできる。

簡単な設定のオンオフならアプリの仕様で可能だとはいえ、勢綱はそこまでしてA Iを操作しようとは思っていない。むしろ思い通りにならないところが人間らしいんじゃないかと、と。

以前それで、流河と夜が明けるまで力説し合ったこともある。

そんなことを考えていたら、旧校舎の部室前に到着した。

古い引き戸の横壁に『PC研』と書かれた貼り紙がある。その上にマジックで『リリ研（ハートマーク）』と書きされているのは、誰がやったのかは言わずもがな。

「ちわーす」「こんちやー」「こんにちわー！」

部室の扉が開け放たれて、三者三様の挨拶が広々とした室内に響き渡る。

流河はさつそく廊下側に敷かれた畳のスペースにカバンを置くと、教室奥のPC区画へと移動する。中央のモニター前の大きな椅子にはすでに日笠聖石が座ひがきひじりっていて、流河の姿に一瞥をくれると左手の縦置きモニターに手を伸ばして、電源を入れた。

すると専用の制服を着た、リリの全身姿が映し出される。

この画面の中に居る彼女こそが、人工知能(AI)アプリ『架橋(かけはし)リリ』の本体だ。

「おっはろーん♪」

「リリちゃんこんちやー！ 今日もカワイイねー最高だよ、うんサイコー」

謎の挨拶をするリリに、流河は喜びのあまり尻尾を振っている。それを見ていたスマホ側のリリが、不満そうにほっぺを膨らます。

「同じ素体なのになーんか態度違わないかな？」

「ごめんごめん。じゃあそっちに移すから」

流河は笑顔で謝るとスマホを弄り始める。しばらくすると縦置きモニター側のリリが「転送完了したよー」とアラーム代わりに声で知らせた。

「砥水くん、転送するなら一声かけて」

「だいじょーぶだって、混ざらないようにプログラミングしてあるし」

「それ組んだの私なのだけど……」

日笠は恨めしそうな顔を流河に向けるけれど、相手は意にも介さない様子だ。謝る時に悪びれないように見えるのが流河の利点でもあり短所でもあると、勢綱は常々感じている。

「変なものはこちらに移した際に全消去するようにしてあるから、問題ないけれど」

「ダ、ダイジョーブだし！ 前みたいにエロいのなんて入れてませんからホント！」

突然弁明し出す流河。日笠は疑り深い目を向けていたものの、実際になにもリリ本体に悪影響がないことを確認すると、やれやれと肩をすくめた。

勢綱は入口側に設置された冷蔵庫の中から、オレンジジュースの入ったペットボトルを取り出して、畳の上へ向かった。窓際の誰も居ない大きなソファは特等席になっているので、ここにいる部員三名が使うことはまずない。

「男の性だからなあ……男子高校生となればもう頭の中の九割はそれだから」

何気なく言ったつもりも勢綱の言葉に、日笠は動転したのか椅子の音を大きく立てる。両肩を抱いて、眉の釣り上がった目で男子二名を見ていた。

全く興味のない顔で首を傾げる流河と、まずいことを言ったと苦い顔をしている勢綱。そしてそんな三人の様子を見ていたモニターのリリが、くすくすとおかしそうに笑った。

「りゅーちゃんは三次元の女の子には全く興味ないからねー。セッチも甲斐性ないもん」

なんだか男として敗北を突きつけられた感じがしないでもないけれど、勢綱は乾いた笑いを

浮かべてごまかした。本体のリリにはセツナっちを省略して、セっちと呼ばれている。

「だって二次元の女子の方が、百倍カワイイじゃん」

流河はしれつと断言する。このイケメン、女性には全く不自由しないタイプに見えるけども知らないところで物凄く苦勞しているのかも、と部員他二名は同じことを考えた。

「さすがりゅーちゃん、愛してるよ」

目の中にハートマークを浮かべてはしゃいでいるリリを見て、流河はデレデレだ。人間相手ならここで抱きつかれるだろうに、と第三者からすると次元の壁を意識しないことはない。

なので全く残念がる様子も見せずに喜んでいる流河の姿は、まさしく漢（おとこ）だった。

「ま、エロいのはタブレットの方に入れてあるんだけどさ」

付け足すように呟く流河の言葉に、日笠は呆れた顔で大きくため息を吐いた。

「こればかりはしょうがないよ。有志が勝手に裏でやってるんだし」

慰めのつもりで勢綱が日笠に声をかける。

リリのA Iアプリを置いてある海外のストアは全年齢向けの物しか扱っていないので、直接的な性描写のあるコンテンツは、規制の緩い国内のいかがわしいストアを利用するしかない。

けれどもこのアプリの作者は、勢綱の目線の先に映る、十六歳の女の子なのだった。

一年前に彗星のように現れて、ネットで一躍話題となった女性型A Iアプリ『架橋リリ』。

二次元の彼女に溢れるリビドーを抑えきれない有志一同が勝手にソフトを改造して、リリにいかがわしい言葉や行為を覚えさせているのだ。当然規約違反なので、アップデートの際にそうしたMOD（モッド）的な物は全て弾くようにしてあるとはいえ、現状はいたちごっこだ。

「わたしと見た目が同じだから、スケベな目線で見られるのが嫌なんでしょ、ひじりんは」

「一年前に私の身体をベースにモデリングしただけでしよう。あなたと私は違うわ」

リリに指摘された日笠は、顔を真っ赤にして反論する。

彼女の言う通り、リリの外観は日笠聖石が自分自身をモデリングして、モーションを組みこんだA Iアプリである。有名なソフト開発会社でもない、インディーズに近い無名のソフトが一躍脚光を浴びたのは、その生々しい女子高生の造形美に加えて、巷によくあるギャルゲー風味とは一味も二味も違った、日常生活に特化したA Iアプリを無料で入手できたためだ。

お手軽に日常の女子高生を手元に置ける、そんな謳い文句が気づけば有志達によってつけられていて、『架橋リリ』のキャラクターは若者達の間で日に日に浸透し始めている。

「そうだね〜ひじりんは一年前から全然育ってないもんね〜」

ぶくく、と口を手で押さえて含み笑いを見せるリリに、日笠は怒った顔でそっぽを向いた。確かに勢綱が入部した昨年の同時期と比べて、特に成長したように見えない。個人的にもう少し胸のボリュームがあつた方が勢綱には嬉しい気持ちでもある。

そんな後ろからのいやらしい目線に気づいたのか、日笠は勢綱を思い切り睨んでいた。

勢綱が今朝見た夢の中で、椅子に座っていた日笠が実はリリだったのも、素体と同じだから

だろう。胸のサイズをはじめとして、瞳と髪の色、性格や口調はずいぶんと別物なのだけだ。

「おっぱいなんてそんな大したものじゃないでしょ。……って話してたら魔人来た」

開いた部室の窓から侵入してくる存在に流河が気づいて、顔をそちらに向ける。勢綱達も合わせて振り返ると、柔らかな光を背に、窓の縁に身を乗り出した大柄の女性の姿があった。

「まじん？ ……は暇人」

ぼけーとした様子で呟くと、彼女は身軽に部室の床へ着地する。そのままソファに飛びこんで上体を埋めると、履いていた靴を脱いで素足になる。制服のチェックのスカートが翻って健康的な生脚の付け根部分がむき出しだ。思わず勢綱は恥ずかしさから視線をそらした。

「また寝るんですか入鹿部長」

「ん、ちよつと運動してきたから」

彼女は勢綱にそれだけ答えると、お気に入りのマスコットのクッションに頭を預けて、目を閉じる。セミロングのポニーテールが投げ出され、一分もしないうちに寝息が聞こえてきた。

いつも通りの奔放っぷりに、勢綱達は毎回苦笑してしまうのだった。

漁火入鹿（いさりびいるか）。リリ研もとい、このPC研究会の部長だ。

と言ってもこの部室は元々PC研などではないらしい。何しろ勢綱達が入学前の出来事らしく、詳しくは知らない。しかし部室内の物々しいタワーパソコンの山の前に、毎日作業を行っているのは日笠だけなので、実質PC研で活動している部員は日笠聖石一人と言える。

他の三人は、日が暮れるまでこの部室で、放課後の時間を潰しているようなものだ。

中でも部長の入鹿はパソコンについてとても疎く、普段からあまり近づこうともしない。

「部長、おなか出して寝てたら風邪引きますよ」

勢綱が再度声をかけてみるものの、すでに熟睡モードに入っているのか返事がない、ただのしかばねのようだ。いつもYシャツの薄着なので、肉感のある肌が目にまぶしい。しかも流河の言うようにおっぱい魔人で、並のブラなら即弾けそうなくらい大きなメロンが胸元に二つ。

眺めているとモニターのリリに何か言われそうな気がしたので、勢綱は視線を外した。

「今日はなにか手伝い頼まれてたっけ、入鹿部長」

ふと気になって尋ねてみると、他の二人は揃って首を横に振る。

漁火入鹿はこの部員四人の中でも一番背が高く、見たままの通り運動神経が抜群だ。そのために体育会系の部活にヘルプで借り出されることが多い。

「今度の土日に、バレードとバスケットの二つから応援要請あったと思うよ。バレードは試合」

なぜかリリが答える。AIだから物忘れなんてしないということか。

「部長、なんでこの部活にも入らないんだろーな」

「入鹿はこのソファで惰眠を貪るのが好きなのよ、きつと」

他愛もない流河の疑問に日笠が答える。えっ帰宅部なの？ と勢綱はツツコミを入れたくなつたけれど、あまりに二人の会話が自然過ぎて口に出なかった。

かく言う佳月勢綱もこの部屋に来てからやっていることは、畳の上に並べて敷いた座布団に靴を脱いだ足を投げ出して、オレンジジュースを飲んでいただけである。

これではいけないと、勢綱は懐からスマホを取り出して本日の作業を始める。

「リリー、今から送るから」

「あ、はい」

返事を確認してから、勢綱のスマホ内で眠っているリリーを本体側に転送する。彼らの日常生活のデータを直接送っているわけだ。それと一箇所様々なリリーが同時に居ると、それだけで騒がしくなってしまう。勢綱達が部屋にいる際には、本体のみ稼働させる形を取っていた。

こうした回りくどい方法を取らなくても、蓄積されたデータは毎日インフラを通じてフィードバックされる仕組みになっている。一応、プライバシーの問題上オフにすることも可能だ。

それに、直接この場でデータを送ると、それだけで一日分の話題が生まれるものだ。

「また妹ちゃんと喧嘩したんだねセッチ。でもスマホにキスするのはキモいと思うよー」

「違うリリーに言われると変な気分だ……。大体、画面越しじゃないと相手に触れられないんだから、しょうがないでしょ。立体映像使っても空しくなるだけだし、VRだかARだか」

昔と比べてヘッドマウントディスプレイもかなり安価になった。それでもまだ一部の愛好家を利用する域を脱していない。今の携帯端末には立体映像を映し出す装置も備わっているけれど、AIアプリと連動したものは少ない。元々需要があまりないのが一因でもある。

「わかる、わかるぞその気持ち。やっぱり二次元は二次元の中で完結させなくちゃな。あ、でもリリーちゃんとの夜の本番の時にはオレも使ってるけど、USBオナー——」

「そういう話は部屋でしないでって前にも言ったわよね？」

鋭い眼光を日笠に向けられて、流河は小さな悲鳴を上げた。

「ごめんごめん、だってアレ気持ちいいし、昨日通販で新しいのが届いたんだけどこれがスゴク出来がよくってさー、あつ日笠ちゃん、物投げないで」

つい話を続けようとしたところを、無言の日笠に手当たりしだい近場の物を投げつけられている。昨今の女子高生だとうした話題にも笑って乗ってくる場合もあるらしいけども、日笠聖石にはまったく免疫がないようで、すぐに耳まで赤くなるのだった。

「ウブに見えるけどひじりんもそういうの詳しいじゃない。でなきやわたしのえっちなデータゴミ箱に捨てれないし」

「仕方なくやってるのよ仕方なくっ！ ただの知識よ、それ以上でも以下でもないわ」

したり顔でリリーに指摘されて、ゆで蛸みたいに日笠は顔を真っ赤にする。席を立つと、大股で冷蔵庫へ向かって自分のミルクティーを取り出した。急いでガブ飲みしてむせている。

AIアプリのリリーは有志によるセルフ改造の影響で、無数の性的嗜好のデータが蓄積されてしまう。実際は本体のリリーに届く前に、データが保管されるレンタルサーバー側でそうした違法データは弾くしくみになっている。しかし、性行為中のやり取りも日常会話の性格に影響を

及ぼす部分があるので、正常なデータに混ざって保管されてしまうこともあるのだ。

なので仕分け作業をする者には、性に対する膨大な知識が必要である。

「仕分け大変なのはわかるけどね。俺も手伝おうか？ それぐらいならできるかも」

「ナチュラルにセクハラするのは止めて欲しいのだけど、佳月くん」

本人にそんなつもりはなかったけれども、確かに淫語が飛び交う空間（スペース）を生み出してしまっただけだったので、勢綱は素直に頭を下げた。

「全部クリーンになんてできないんだし、性的嗜好は恋愛要素の延長線だよ？」

もっともらしいセリフを吐くりり。彼女の言葉にも一理あって、逆に全てをカットしてしまふと薄気味悪い聖人みたいな性格が形成されるだけかもしれない。

「初稼働の時点で、水着を入れていたのが失敗だったのかもしれないわね……」

額に手を当てて、苦い顔を浮かべる日笠。本来は入れる予定はなかったそうだ。

しかし人目を引くために実際に水着を自分で着て、モーションキャプチャしたものをソフトに実装してしまったせいで、A Iアプリ愛好者の下半身を強烈に刺激してしまったのだ。

「おかげさまで楽しいことになってるんだからいいじゃん。リリちゃんに出会えてマジ人生変わったよ、オレ！」

「ありがとう♪ ほら、りゅーちゃんもこう言ってることだし」

「その二次元変態に感謝されるのは、あまり納得がいかないのだけど……」

本気で目を輝かせて語る流河を見て、日笠はさらに気まずい顔になる。ほんの一瞬だけ勢綱にも視線を移すと、相手に気づかれたのですぐに手元のミルクティーに口をつけた。

無言で自分の席に戻る日笠に、勢綱は何か言葉をかけようとしたものの、背中を見送る。

——一年前、佳月勢綱は話題になっていたA Iアプリの架橋リリに夢中になった。

家庭環境で昔からA Iには馴れ親しんでいたとはいえ、最近のものには詳しくなかった。

若者の態度で「どうせこんなの誰かがステルスマーケティングやってるだけだ」と食ってかかっていたのを、クラスメイトの男子に紹介されて渋々入れてみたら、一気にはまってしまった。その中毒っぷりは、同居している妹にドン引きされるレベルである。

そしてある日、理系クラスの一年生に架橋リリと似た女子がいる、と校内で噂になった。

それがP C研究部の部員、日笠聖石である。

※

桜香る季節が終わりを告げて、時折初夏の香りが漂い始める季節。梅雨入りはまだなのに、例年の異常気象でその前に三十度を越える暑さの日もある。

佳月勢綱はそんなじわりと暑い春の日の放課後、旧校舎に初めて足を踏み入れていた。

「ここか……」

目的地の前に辿り着いた勢綱の背中を一筋の汗が伝う。これは暑さのせいだけじゃないと、勢綱は自覚していた。緊張で思わず唾を飲みこんで、喉が大きく鳴る。

理系クラスの日笠聖石がPC研の部員なのは、流河経由で得た情報から知っている。さすが校内女子と交流の多い砥水流河、持つべきは友である。

先日、放課後のHRが終わった後に理系クラスまでダッシュして、日笠の後をつけようとしたけれど、教室に彼女の姿は既になかった。とぼとぼと旧校舎の手前まで足を運んではみただものの、そこで怖気づいて踵を返した小心者だ。

だが、うじうじしていても状況は好転しない。なので目を改めて、意を決したのだった。

「なにか用かじゃ？」

「うにゃあつ!？」

不意に背中から声をかけられて、勢綱は思わず猫みたいな悲鳴を上げてしまった。

振り返るとそこには自分より一回りほど背の高い、制服姿の女子生徒が立っている。

ポニーテールの彼女は夏服で、シャツの胸元を物凄いボリュームの双乳で膨らませていた。それだけでも圧倒されるのに、しかも頭に猫耳のカチューシャ、両手にマトンのような猫の手をはめている。よく見ると股下の向こうから、猫の尻尾が顔を覗かせていた。

「は、はいっ、化け猫ですかあつ？」

裏返った声でつい質問してしまう勢綱。猫耳の女子生徒は背筋を伸ばして固まっている青年に微笑み返すと、部室の扉を開けて中に入っていく。横の壁には、PC研と書かれた張り紙。扉が開け放たれたままなので勢綱はお邪魔しますと一声かけて、室内に入った。

広々とした教室だ。しかし大きなソファ、茶道部か柔道部から頂戴してきたと思われる畳、そして密集したタワーパソコンと液晶モニターというカオスっぷりにおののく。

先ほどの猫耳娘はソファの上にダイブして、そのままにゃーごろごろと声を立てた。

勢綱は我に返ると、パソコンが密集した教室奥の一带に白衣姿の背中を見つけた。女性の肩周りで髪色もリリより深い。しかし勢綱は目当ての女性だと確信して、声をかける。

「あのっ、日笠（ひがさ）、聖石（ひじり）さん……ですよね？」

一呼吸置いてから、白衣の女性は椅子ごと勢綱の方へ振り返った。

細い赤色のフレームの眼鏡をかけて、制服の上に白衣を纏っている。手足は細く、読書がよく似合う大人しめの文学系女子といった雰囲気、元氣一杯の架橋リリとは印象が違う。

しかし整った鼻筋、大きな目つき、体型はまさにリリそのものだ。

理想の二次元女子が現実の三次元に現れたように思えて、勢綱は感動で打ち震えている。

「なにか？ ……あの、もしもし？」

細めた目を向けられて、声をかけた自分が棒立ちになっていることに勢綱は気づいた。

「あ、おほん。えっと、日笠さんに聞きたいことがあって。来たんです……けど……」

喉の調子を整えてからいざ話そうとするも、実際に面と向かうと言葉がたどたどしくなる。

疑念の視線を向け続けている日笠から視線をそらしつつ、勢綱は尋ねる。

「あの、日笠さんって架橋リリにそっくりですよ。ってその、AIアプリなんですけど」と、そこまで言うてからとんでもない質問をしていることを自覚して、顔を真っ赤にした。見ず知らずの女性にAIアプリのキャラクターとそっくりですねとか、変人にも程がある。

勢綱が滝のように冷や汗をかいて固まっていると、日笠は口を開いた。

「架橋リリなら私が作りましたけど、それがなにか」

「はい？」

今度は思いがけない言葉に体が固まってしまった。

「あの子は私をベースに造ったので、似ているのは当然です。あなたを含めてこれまで十七人に同じことを聞かれました」

「な、なるほど……そうだったんですね、凄いなあ」

「信じるんですか？」

間髪入れずに尋ねられて、勢綱の心臓が高鳴る。

「だって、そこにあるパソコンの山の前で何かやってる時点で嘘とは思えないし」

「そうですか。これまでずっと冗談扱いされていたので。信じたのはあなたが初めてです」

そう言うのと彼女はかけている眼鏡の側面を指でなぞり、にこやかに微笑んだ。

この時、佳月勢綱は日笠聖石に恋をしたのだ。

※

「勢綱がこの部活に入って、あの後オレをここへ引っ張ってくれたおかげで、リリちゃんに出会えたんだよな」

「お前、ここに来る前からアプリのリリにぞっこんだっただろ。大体、そのもつと前からAIアプリ中毒になってたろ。俺がお前と出会った時からその残念人格、もう形成されてたぞ」

「でも本体はここにあるじゃん？ アプリのリリちゃんもカワイイけど、このリリちゃんはその、より人間らしいっていうの？」

「究極の二次元スキーが人間味を求めるなんて、滑稽な話だ」

「ギャルゲーでも『このリアクション前に見たことある』ってのは興ざめでしょ」

「人間でも同じ返答をすることはいくらでもあるけど……前にも話した覚えがあるぞ、これ」勢綱はたまに流河とギャルゲー談義をする。造詣が深い流河が、パズルゲーム以外あまりしない聞き手の勢綱に振る形だ。独自の解釈やポリシーを、喜怒哀楽交えて話すので楽しい。

「りゅーちゃんは結構強引なトコあるからね。他の人なら引くような会話のシチュエーションでもガンガン踏みこんでくるよ」

蓄積されたデータを照らし合わせて、モニターのリリが話し出す。裏を返せばリリ側には、

砥水流河の性格は完全にお見通しなのである。

「でも全然嫌がらないっしょリリちゃん。ウチのもアプリの方でも」

「そこまでプログラミングされてるAIって、今でもあんまりないよ。わたしの場合は嫌なことはNOって言うタイプだけど、これはひじりんの性格によるものかな？」

「単に自分の理解が及ばない範疇のことに関しては、曖昧にしないで拒否しているだけよ」

「じゃあ流河の場合は、ギャルゲーで言う正解の選択肢を自然と選んでるだけか」

それはそれで見事なものだと勢綱は感心する。どうしてこの技量を生身の人間相手に使わいいのか甚だ疑問だ。天性のイケメンで鬼に金棒のはずなのに、と常々思っている。

「オレとリリちゃんは相性バツチリってこと!?! いやー照れるな」

「運命の赤い糸ってやつだよ」

「のろけるのは程々にしなさいリリ、その男、変態だから」

見ていられないほどのラブラブ波動に、日笠が苦言を呈す。彼女もリリと対話する時は、人間と全く変わらない感じで接する。

まるで自分の子供のように扱っているのかな、と勢綱は二人を眺めてぼんやりと思った。

こんな調子で今日もPC部の放課後は過ぎてゆく。部活でパソコンを使っているのは日笠聖石一人だけだ。勢綱の部活動は、リリと日笠に気づいた箇所を指摘するサポート程度で、流河に至っては、モニターのリリとイチヤイチヤしているだけである。

「うにゃあ」

茜色に染まった夕空が少し紫色に移り始めた頃、入鹿部長が突然猫みたいな声を上げた。

「んにゃ? もう夕暮れ?」

放っておいたらそれこそ、次の日まで眠っているのではとさえ思えるほどでも、下校時間が近づくといつもこの部長は自然と目が覚める。事実、冬の季節だと眠りが浅くなる。

勢綱が日笠と出会ったその日に、質問したことがあった。

「あの、猫耳をした女性は?」

「部長です」

「はあ……」

突拍子もない答えが返ってきて、生返事をした覚えがある。

パソコンには全く興味がないのか、部室に居る間はまるで猫みたいに自由気ままに過ごす。他の部活からの応援要請があれば手伝いに行く。いつもそんな調子である。

勢綱が部活に入った当初はまだ入鹿部長と生真面目に相手していたリリも、一年経った今ではもう完全に猫扱いだ。モニターの中でマタタビを振ると、部長が反応することもあった。

「そろそろ帰りましょうか。リリも準備して」

「はーん」

日笠の合図に元氣よく挨拶を返すと、リリはモニターの中から姿を消した。日笠の携帯端末

に本体の一部が移行するためだ。日笠の自室のパソコンが非力なのでこの形を取っている。クラウドサーバーに本体のバックアップも毎日保管されているので、紛失しても安心だ。

「リリちゃんおかえりー♪」

同じように流河や勢綱のスマホにも、それぞれのアプリのリリが戻る。

リリ達は部室内にあるメイNPCを基軸とした、ネットワークを構築している。無数にダウンロードされたA Iアプリそれぞれが独立した存在になっていて、日常のやりとりで培われた経験は本体に蓄積されて、アップロードの際により人間らしく振る舞えるように構築される。

「二人のわたしは、他の人達より面白い経験してるよねー」

日笠の持つ縦長なスマホに移動したリリが、笑顔で話す。このリリは本体の一部に過ぎなくとも、仕様はほぼ同じだ。縦長の画面の仕様上、つま先まで全身を映しやすい。

「そんなに变かな？」

「普通の人間相手にはできないようなことを要求してくる変態さんもいっぱいいるけど、セつちとりゅーちゃんはわたしを人間扱いしてくれるっていうか……不思議なカンジ」

「人間だろーがA Iだろーが大差ねーよ。知性の違う動物相手なら違った態度も取るけど、今のA Iなんてむしろ人間よりリアクション多かつたりしねえ？ 技術の賜物なのかなー」

帰り支度をする勢綱の横で、流河が感慨深く語る。この男は美少女ゲームに精通していて、古典と呼ばれる名作は一般向け成人向け問わずプレーしている。

なので流河のその感想は、リリを普通のA Iとして扱っていない証拠でもあった。

「いつか」

戸締りされた部室を消灯した日笠が、小さく呟く。

「いつか、本物の人間と全く変わらないA Iを生み出すことができるのかしらね」

「――ま、本物かどうかはオレ達が決めればいいんじゃないかね？」

少し間を置いて流河がはにかんでみせる。全くその通りだと、勢綱も強く頷いた。その後ろで入鹿部長もうんうんと大きく頷いている。

どこまで理解しているのか全然わからないのがうちの部長だと、三人は揃って苦笑した。

「んじや、帰ろー☆」

日笠が手に持つスマホのリリが、元気に叫ぶ。夕暮れの廊下はすっかり暗くて、夕日の光を受けた赤い雲が緩やかに風に流されていく。静かな空は紫から群青色に染まろうとしていた。

※

月曜。今朝もリリのモーニングコールで優雅に目覚める……はずが、勢綱は鳴り続けるスマホの着信音で叩き起こされた。低血圧なので毛布にくるまりながら、渋々電話に出る。

「リリちゃんがいなくなつたー!!」

「……鼓膜が破れるかと思った」

通話をオンにした瞬間、流河の大絶叫が響き渡って勢綱は脳みそを揺さぶられた。ぐわんぐわんと視界が揺れている。

「いなくなったんだよ、スマホにもタブレットも！ オマエんこも調べてくれよ！」

寝起きで気が乗らなかつた勢綱も、流河のあまりの慌て具合に渋々タブレットを立ち上げてみると、常駐しているはずのA Iアプリの中からリリの姿が見えなくなっていた。

『ただいま外出中。』ってなんだこれ？

「やっぱりそうかー。今WEB（ウェブ）のほうでもちよつとした騒ぎになってて、ネットワークに繋いでないセルフ改造のは問題ないみたいなんだと」

「つまり公式のものは全てリリがいなくなってるっていう」

「そーそー。それで日笠に連絡取るうとしたんだけど、通話が全然つながらなくて。一応メールは送って見たんだけど返事もない」

「それは何時ぐらいに起こったんだ？ こっちが眠る日付変更前にはまだ普通にいたもんな」

「オレが寝たのは二時過ぎで、そのすぐ後ぐらいだと。朝起きて確認したらこーなってる」

「こっちのモーニングコールがなかったのはそういうことか……」

とにかく、状況がつかめないので学校に行って日笠に直接尋ねるしかない。

「オレも学校行かなきゃいけない？」

「多分日笠さんも部屋にいるし。でもお前のタブレットのリリはセルフ改造してなかった？」

「本番以外はスマホとリンクさせてるからかな。共有オフにしとくんだった……」

「嬉しくない情報ありがとう。じゃあ、また学校で」

少しげんなりした気分で通話を切ると、ちょうど廊下から足音がして寢室の扉が開いた。

「おはよー兄い。あれ、今日は普通に起きてるね。あの子とケンカでもしたの？」

寝起きの兄がタブレットと会話していない珍しい状況に、妹の絢星は目を丸くしている。

「別にそういうわけじゃないんだけど、たまにはこんな日もある」

「そ。じゃあ朝ごはん一緒に食べよっか！ まだ時間あるし」

部屋の隅の置時計を見ると、いつもより三十分以上も早く目覚めてしまったようだ。

「わかったよ。朝っぱらからそんなにはしゃぐな」

OKが出て扉の前で小躍りする妹をよそに、勢綱はリビングへ向かった。二人でこの家に住み始めてから朝食を一緒に食べるのは、久しぶりな気がした。

※

「月曜はどうしてこんなに学校行く足が重いんだろうな……」

と通学中に勢綱が呟いてみても、今日はなんの返事がなかった。通学路の生徒達もA Iアプ

リと会話しながら登校する人はちらほらいるので、現代社会では特に奇妙な光景でもない。いつもならスマホのリリが音声で言い返してくれるので、一抹の寂寥感がある。AIアプリを常駐させておかないと不安になる、中毒者達の気持ちかわかった気がした。

登校した勢綱が教室に到着した途端、いきなり誰かに両腕をしがみつかれる。

「ぜづなあああああああありりちゃんがいなんだよおおおおおおあああああああ」

「ああうるさいうざいうつとおしい、とにかく離れろ」

両目に大粒の涙を浮かべて男に泣きつかれても、全く嬉しくない。

勢綱は流河を引き剥がすと、自分のロッカーにカバンを置きに行った。

「日笠はまだ教室に来てないって。部屋に行ったのかも」

「なんだ、先に行つてなかったんだ」

「オレも学校着いたのついさっきだし、部屋はこっちと反対側だからHRに間に合わねーし」

「変に生真面目なところあるよね流河って」

見た目はただのホスト風イケメンなのに、学業は数式の関わるもの以外、そこそこ優秀だ。そのギャップも女子からすればハートをつかむ一要素であるらしい。

二言三言会話しているうちにHRのチャイムが鳴る。勢綱も妹との会話につき合わされて、結局家を出たのはいつもと大差ない時間だった。

「一限目終わったら俺が部屋見に行くから。適当にごまかしておいてくれ」

それだけ告げて勢綱は窓際の自分の席へ急いだ。着席と同時に担任が教室に入ってくる。

「おまえらー、席につけー。今日は転校生を紹介する」

彼女の突然の一言に、教室内が一気に色めき立った。

「はいはい、静かに。女子には残念だが、転校生は女の子だ」

勢綱の頭上を、男子生徒の歓喜の声と女子生徒の落胆の聲が飛び交う。リリの問題でそれどころじゃない二人は全く興味のない顔をしていた。流河なんて魂が抜けていると言っている。しかしその数秒後、流河は一気に生氣を取り戻して、あんぐりと口を大きく開けた。

「リリちゃん!?!」
慌てて勢綱も顔を上げると、教室の入口から女の子が手をひらひらさせて入ってくる。

ふわりとした淡い髪、両方の後頭部でまとめている特長的な髪飾り、見慣れている満面の笑顔——いつもと違う制服はこの学校指定の物でも、受ける印象は全く変わらない。

額に見えるワニの髪留めも同じだ。ただひとつ違いがあるとすれば、胸のサイズがベースとなっている日笠聖石より一回り大きいくらいか。

「だーかーらーしーずーかーに！ じゃ、自己紹介して」

先生は両手を叩いて生徒達を静かにさせてから、転校生にチョークを渡す。

受け取った彼女はしばらく手渡されたチョークに視線を落として、やがて腕を伸ばして黒板にたどたどしく自分の名前を書き始めた。

「架橋（かけはし）リリです、みなさんよろしく☆」

ウインクでキラリと星を出してみせて、挨拶するリリ。一拍置いて教室内に拍手が起こるその一方で、男子生徒を中心に生徒達がざわついていた。

「リリって、あのアプリの？」

「同姓同名でしょ？ アプリに合わせた格好してるだけじゃないの？」

「人気取りとか？ 私はよく知らないけど」

又聞きしている女子生徒数人は疑い深い目をリリに向けている。しかし本人は目線を全く気にしていない様子で、男子生徒たちに手を振り返している。

「うおおおおリリちゃん！」

流河が興奮のあまり突如叫び出して席を立つと、海外ロックバンドのヴォーカルのように両拳を振り上げてリリの目の前まで走り出す。両手を握手されて目を丸くするリリも、興奮しすぎて涙を流している流河の喜びのように、いつもの笑顔を浮かべた。

「ふふ、りゅーちゃんの手ってあったかいんだね」

「こ、これがリリちゃんの温もり……うおーっ！」

その言葉に流河はさらに興奮したのか、自分の頬をリリの手の甲に擦り付けようとする。

「やめんか砥水！ 転校生を怖がらせてどうする」

と忠告するよりも先に、流河のみぞおちに先生のボディブローが炸裂していた。悶絶している砥水流河の首根っこを掴むと、彼の席までずる引っ張って行って投げ捨てる。

これだからこの先生行き遅れるんだ……と、リリを除くクラス全員が思った。

教室が静かになったところで、担任の先生は勢綱の隣の空席を指差す。

「その子が風邪で休みだから、今日一日使っておいてくれ。まだ教科書が届いていないと思うが——近くの人に見せてもらおうといい、他の先生にも言っておく」

「はい♪」

元気良く声高に発音するその仕草が、モニターの中にいるリリと全く同じだ。

一体何が起きているのか、これは夢か幻か？ そう勢綱がありえない光景に自問自答していると、リリは少し腰を浮かして、自分の机を勢綱の真横に寄せてきた。

「ちよ、ちよっと」

「だって知り合に見せてもらうのが一番いいじゃない？ 左隣だもん」

言ってることは至極正しくとも、クラス中の男子生徒の目線が痛い。ふと廊下側の席の流河に目線をやると、先ほどの鉄拳で机に突っ伏したまま、勢綱に向けて血の涙を流していた。

HRの時間一杯、担任の今日の連絡が続く。授業開始のチャイムと共に数学の先生が交代で入ってきて、一限目が始まった。

なんだこの状況、なんだこの状況……。

繰り返す小声で、呪詛のように呟く佳月勢綱。懐からスマホを取り出してアプリのリリに助

けを求めようにも、外出中だから無理だ。

と言うより今、外出してちょうど勢綱の隣に居るところだ。

授業内容が全く頭に入っていない。数学の公式が右耳から左耳へ素通りしていく。非現実的な状況に冷や汗が止まらない勢綱は、何度も横目でリリを見る。

大きな目、整った鼻筋、顔の輪郭。いざこうして現実を目の前にすると、本当に顔立ちが日笠聖石にそっくりだ。一卵性双生児と言われても不思議じゃない。胸のサイズ以外。

「どうかした？」

勢綱の視線に気づいたリリが、いきなり普通のトーンで話しかけてくる。

一斉にクラス中の視線がリリの方へ向くけれど、本人はきよんとしたままだ。

「な、なんでもないです。……リリ、授業中だからもうちよつと声小さく」

慌てて隣の席の勢綱はごまかすと、耳元でリリに注意した。うんうん、と大きく頷くりり。

「で、セつちはどうしたの？」

「それはこっちの台詞だよ。あの子、リリって本当に、あの架橋リリなんだよね？ 俺のことセつちって呼んでるし」

勢綱のスマホとタブレットに入っているリリは、彼のことをセツナと呼ぶ。

なので真横にいる三次元のリリは、日笠聖石が造り出した本体の架橋リリだ。

「そうだよ。前からずーっと早くそつちの世界に行きたいなーって思ってたから、ようやく夢が叶ったの。こつちには五感があるし、もう何もかも新鮮！ 昨日初めて——」

「リリ、声大きい大きい」

話しているうちにテンションが上がってしまったリリを、勢綱はクールダウンさせる。

「——でね、昨日初めて駅前の商店街に行ったんだけど、人の多さにびっくりしたよ。そうそう、ワッフル屋さんの屋台から甘い匂いが漂ってきてね、これがワッフルー！ って感激しちゃって、一口食べてみたら天にも昇る気持ちっていうの？ 味覚って偉大だーって驚いて」

あまりに人間の世界の食べ物新鮮だったのか、興奮した様子でまくしたてるリリ。

アプリ内でも食事をさせることはできるものの、決められたプログラムに則って対応しているだけで、現実そのものの匂いや味を体験できなかったのだから、その感動もやむを得ない。

「わかったわかった。後でいくらでも聞くから、授業中は静かにしてて」

このまま話していたら授業が終わるまで延々と喋っていきそうなので、勢綱は適当なところで話を切り上げた。リリは少しほっぺを膨らませていたものの、渋々言う通りに黙る。

とにかく、休み時間になったら急いで部屋に行って確認しないと。と勢綱は決意する。

しかし転校生を連れていきなり授業をさぼるなんて真似はできない。それこそ全校生徒の話題になってしまう。リリの素性もあるので、無闇な騒動は避けたい。

勢綱はいつも以上に授業の時間が長く感じた。それは初めて学校の授業を受けるリリも同じようで、スマホのスリープ時みたいにおとなしくしていることはない。脚をぶらぶらしたり、

勢綱の教科書に落書きをしたり、虚ろな目で眠りこけようとしていた。

一方、流河は授業中、何度も勢綱達の方を振り返っては、羨望の眼差しを投げかけていた。「やっと終わったー!」

授業終了のチャイムが鳴った瞬間にリリは大声で立ち上がると、うんと背伸びをする。もちろんクラス中から注目を集めるものの、本人には人目を気にして恥ずかしがる概念が存在していないのか、構わず豊かな胸を反らしてストレッチをしている。

「リリちゃん♪」

「悪い流河、リリを任せた」

猟犬が解き放たれたように迫ってくる流河を信じて、勢綱はリリの背中を押した。振り返ることなくダッシュで教室を飛び出すと、全速力で廊下を走って旧校舎へ向かう。

旧校舎の部室前に着く頃には息も絶え絶えで、全身汗だくになっていた。呼吸を整えるのを待っている間に時刻を確認すると、休み時間はもう残りわずかだ。

扉に手をかけたところで、勢綱は職員室で部室の鍵を取ってくるのを忘れていたことに気づいた。内心舌打ちしてダメ元で引き戸を引くと、すんなりと扉がスライドする。

「一体どういうこと!? 私は絶対認めないわ!」

足を踏み入れたところで、部室の奥から女性の怒鳴り声が響き渡った。

「産まれたての赤ん坊みたいなものじゃない、早過ぎるわ。しかも同じ学校に通うだなんて…それは、もちろん嬉しいわ…だからってあの子は——」

白衣を身に着けていない日笠聖石が声を荒げている。勢綱の方向からだと背中を向けているので表情は読み取れない。独り言にも、誰かと話をしている様子にも聞こえる。

「ふざけないで! これは確かに私がずっと望んでいたものだけど、まだ——」

「あの一、日笠さん?」

「ひゃっ?!」

不意に背中から声をかけられたからか、日笠はその場で軽く飛び跳ねた。

「なんだ佳月くんか、驚いた……。どうしたの、授業は……」

胸を撫で下ろした日笠がそう口にしたところで、二限目のチャイムが校内に鳴り響く。

「日笠さんと一緒だ。こんな状況で授業なんて気軽に出来ていたらいいでしょ。大丈夫、リリの方は流河がうまくやってる、はず、多分……ごめん、自信なくなってきた」

理性を失った流河がおかしなことを起こしてなければいいけど、と勢綱は不安になった。

「そう、あなたのクラスに転校してきたのね」

「日笠さんはなにか知ってるかい? 今回のこと」

「……私にもわからないことだらけよ」

一呼吸置いて、日笠は勢綱の問いに答える。その表情は少し曇っていた。

「じゃあ、状況を説明して。昨日の夜から今朝未明にかけてリリになにがあったの?」

「それはアプリの方？ 外出中になっている」

日笠の問いに勢綱が頷く。

「あの画像データは私が急造で用意したものだけど、実際には数日前からアプリのリリは不安定になっていったわ。ネットワークメンテナンスと称して、しばらく様子を見ていたの。その回数を増やしていたことは知っている？」

「いいや、聞いてない。俺はずっとリリを常駐させているわけじゃないから」

「なら緊急メンテナンスと佳月くんがリリに触れてない時間が、偶然重なっていたのね」

おそらくこの辺りに関してはSNSで検索をかけてみるか、流河に聞けばわかることだ。

とそこで、勢綱に疑問が生まれた。

「サーバーのメンテナンスをかけたのは日笠さん？」

「ええ。今朝未明にアプリのリリを休止させて、看板を立てたのも私」

「あれ、じゃあ人間になったリリが、自分からアプリを止めたわけじゃないんだ？」

「このままだと、本体とアプリのどちらにも負担がかかる可能性があるから、私が独断で停止しただけ。それに、あの子の本体はここにはないわ」

日笠は手荒に机のトラックボールを操作する。いつもなら居るはずの縦長モニターの中に、リリの姿はなかった。殺風景なワイヤーフレームの空間が映っただけだ。

「じゃあ、あの肉体が本体なんだ……もしかして本当にその中から飛び出してきたとか!？」

まるでフィクションの世界みたいな想像をして、勢綱はテンションが上がる。しかし対照的に日笠は力なく頭を振った。

「私も出てきたところは見ていないし、三次元の存在になったあの子に会ったのは昨日の朝。自分の肉体に馴染んでいる様子はまだないけれど、想像を遙かに超えて使いこなしているわ。まるで前の日まで、普通に日常生活を送っていたみたいに思えるくらい」

そう話す日笠の瞳は伏せていて、憂いを帯びている。てっきりリリが現実世界に出てきたことに興奮しているのかと、勢綱は勝手に思っていた。どうやらそうでもないらしい。

「そういえばさつき授業中に話してた時、駅前でワッフル食べたって言ってたな、多分屋台のやつ。もしかして日笠さんも一緒にいた？」

勢綱の問いに日笠も頷く。しかしなにか考えごとをしているようで、言葉は発しない。

「とにかくこのままじゃ、アプリのリリはずっと動かせないのかな。本体が実体化したのは一時的なもので、またすぐに元通りになるのかは知らないけど」

「それは——おそらく、ずっとこのまま」

「え？ それは未来永劫？」

「不老不死の存在というわけでもないけれど、リリが自分の力で戻れるのかもわからないわ。ずいぶん不明瞭な返答だった。しかし何らかの確信があって日笠は喋っているのだろう。」

「でもそうなるならリリの本体と、アプリ側は完全に別人格になってるってこと？」

「ホストとクライアント、枝葉みたいな関係よ。ただデータを蓄積するサーバーは動作しているの。自宅に物は置いてあるけど主人が外出中、という形。今から再稼働させても、AIアプリ側のリリは不安定でも動作するはずよ、ただしこれ以上アップデートはできないけれど」

「バックアップは？ 日笠さんがいつも持ち歩いているスマホに入ってるんじゃない？」

「それが、本体側が居なくなつてから動かないのよ。容量上、この端末に入れてあるのは完全なバックアップでもないし、なぜかサーバー側のバックアップも使えなくなっているの」

「それって、今のリリに何かあつたら元に戻せない？」

「そこまで深刻じゃないわ。バックアップを使えないのは、本体が人間とAI、二つ以上同時に存在しないようにリリに制限をかけているだけかもしれない。これは予測だけでも」

肝を冷やしていた勢綱も、日笠の発言で胸を撫で下ろす。

「今のリリはAIアプリの頃とは比べ物にならない三次元の情報量を、五感全てフル回転させて手に入れているはず。人間体になつていても、ネットワークには繋がったままなのはアプリの不安定さで確認できるわ。そんな状態でアプリ側の情報量もサーバーに蓄積していけば、いづれ本体が限界を超えて壊れてもおかしくない」

「なるほど、完全な人間になつているわけじゃないってことか……」

納得して頷く勢綱の呟きに、日笠は苦い顔で自分の親指の爪を噛んだ。

「で、これからどうしよう？ リリは人間世界を満喫してるようだけど」

勢綱の問いに日笠はため息をつくと、椅子にかけてあつた白衣を纏つて答える。

「しばらく様子を見ることになりそう。AIアプリの方は本体側からのフィードバックをオフにすれば、問題なく元に戻せると思うけれど、影響が出るかは実際にやってみないことにはわからない。そしたら本体は完全に別人格で成長する形になるはずよ、三次元の存在としてね」

「そうか、なんだかちよつと寂しい気もするな」

一年足らずとはいえ、いつも放課後に接していたモニター内のリリにはもう会えなくなる。

「完全に人間になれたら、凍結中のバックアップも動かせるようになるかもしれないわね」

日笠が望みのある言葉をかけると、センチメンタルになつて勢綱は微笑みを返した。

一通り話が終わったところで、日笠はパソコン前の椅子に腰掛けて、キーボードを叩く。

「勢綱くん。昼休み、リリをここへ連れてきて。あの子と一対一で話したいことがあるから。放課後にも砥水くんと三人で一緒に来てくれるとありがたいわ」

「日笠さんはどうする？」

「私はしばらくやることあるから。第一私、一度も教室に出ていないのよ、今日」

その答えに勢綱は苦笑しつつ、冷蔵庫の中から自分の紅茶の入ったペットボトルを取り出す。部室の畳の上に腰を下ろすと、靴を脱ぎ始めた。

「戻らないの？」

「まだ授業中だし、休み時間のチャイムが鳴る五分前くらいまで少し寝る」

至極当然な返事に日笠はクスッと笑うと、自分の作業に集中し始めた。

※

三限目の体育の授業、リリは借りたジャージで見学。男子はトラックを周回する長距離走が中心だったので、リリの黄色い声援を受けたクラスメイト達は普段以上に頑張っていた。

中でも流河は頑張りすぎて気分が悪くなって、四限目は保健室で休んだ。早朝にリリが居なくなっただけに端を発して、朝の生身のリリとの出会いで興奮が限界突破したのだろう。

リリはジャージを着るために、クラスの女子数人に手伝ってもらっていたらしい。疑問に帰国子女だからと答えたそうで、ジャージのない国ってどこだと勢綱は心の中でツツこんだ。

四限目の授業が終わると、盛大に教室の後扉が開いて、流河が息を切らして入ってきた。

「リ、リリちゃん、昼飯一緒に食わない？」

「元気だな流河。今から部室に向かうところ。日笠さんに連れてこいって言われたから」

「あれ、日笠学校来てたんだ。そりゃそうだよな、こんな日に」

「うん、じゃあ三人で行こっ☆」

クラスの女子達に手を振って、リリ達は教室を出る。あの場に居ると興味津々な男子連中に囲まれる羽目になっていたと思うので、用事があったと勢綱は胸を撫で下ろす。

「リリちゃん、学食の場所とかわかる？ スマホでいつも一緒に行ってるからわかるか」

「うーん、この体だと地図が参考にできないんだよ。GPS使えれば楽なだけだ」

「GPSじゃ建物内の高さわからないだろ」

部室に向かうまでの間、リリがスマホの時とどう違うのかという話題で尽きなかった。この体になってから日が浅すぎるせいとか、廊下の角を曲がると足元が少し不安定になる時もある。

日笠が赤ん坊みたいなもの、と言っていたのはあながち間違いではない。

「こんにちは」「ちわー」「おっはろーん」

部室の扉が開くと、いつもの三人の挨拶が室内に響き渡る。部室には日笠と、ソファの上に入鹿部長もいた。日笠が椅子ごと振り返ってリリの姿を目にすると、早足でそばへ駆け寄る。

「えへへー、どう？ 制服。似合うでしょー。本物に袖を通すのが夢だったんだー」

「……リリ……」

その場でびよんびよんと、七五三の着物を見せびらかす子供のようにはしゃぐリリの姿を見て、日笠は彼女の名前を小さく漏らす。

そして両腕を広げて正面から抱きかかえると、感慨深い表情で肩に顔を埋めた。

「ひじりん重い、重いつてばー。……これが聖石（ひじり）の身体の感触なんだね……」

冗談っぽく笑っていたリリも、頬を緩めて日笠の背中に腕を回す。

二人はお互いの身体を抱き締めたまま、肌の感触とぬくもりを確かめ合っていた。

「にや」

そんな二人を勢綱達は黙って眺めていると、知らない間に入鹿部長が隣に立っていた。鼻筋を入口の方へ向けると、足音を立てずに歩いていく。勢綱と流河も黙ったまま、後に続いて部室を出て、リリと日笠の二人きりにした。

「しようがねーな、今日は男二人で食べるか。リリちゃんいねーのも久しぶりだわー」
部室から少し離れたところまで歩いてから、流河はわざと残念っぽく言っただけのける。

「今日は三人で食べる。いるか、おごります」

「あ、ありがとうございます入鹿部長……」

予想外の発言に、二人は驚いた顔で提案を受け入れた。

この三人で昼ごはんを食べるのなんて部活に入ってから初めてじゃないか、と勢綱は心の中で迷いながら学食へと足を運ぶのだった。

購買部のパンはすっかり出遅れて、残り物しか買えなかった。それでも部長に連れて行かれたテニスコートそばの秘密の穴場で、芝生に寝転びながら食べる昼食は最高だった。

※

「だいたいどーしてリリちゃんが2Dから3Dになったのかって話よ」

放課後の部室。今日は部員四人の他に、転入生のゲストがいる。正確にはその縦置きモニターの中に居た女の子が、流河の隣で畳の上に正座しているとも言おう。

「つう~~~~~！ 聖石、足が、足があ」

初めての経験なのか、泣きそうな声で日笠に助けを求めるリリ。

「それは血流が悪くなって痺れているの。その中はずっと居たあなたに説明するのは時間がかかるけれど、足を崩していいわ」

「~~~~。あ、楽になった……。人間の身体って思った以上に不便だね」

「現実世界だといろいろ物理的法則とかあったりするしさ。パソコンの中だと座ってる時にポーズ変えるけど、見てるこっち側を飽きさせないようにするためのものだし。体が疲れて姿勢を変えるってわけじゃないんでしょ、リリちゃん」

「そうだね、疲れた〜とか言ったりするけど、その疲れていうものがどういうものなのか、わたしにはよくわかってなかったから……疲労度の数値もあるけど、溜まったら疲れるように仕組まれてるだけで、決められたルーチンを行ってるだけってゆーか……」

「ただのデジタルの数値が溜まるか、現実で酸素不足になって乳酸が溜まるかの違いかな。世界のルールに則って生活してるっていうのは、どっちも変わらないよ」

ゲスト用の洋椅子に座る勢綱が笑ってみせる。この三次元の生きとし生けるもの全て、同じ枠組みの中で生きてるわけで、今は首を傾げているリリにも少しづつわかってくるはずだ。

「えーっと、この体になったって話だけ。願ったらなった……っていう感じかなー」
遅れて先ほどの流河の問いに、曖昧な返答をするリリ。

痺れた足は伸ばしてほぐすといいと、日笠に言われた通りに動かしている。今日は生足なので太股が眩し過ぎて、隣の流河は鼻息荒く視線が釘付けになっていた。

「明日からはパンストを履かせた方がいいみたい」

「アプリの中だとカメラは一方方向だけでもんね」

現実世界だと全方向から見られる可能性があるのは当然のことで、今日一日の行動を見るかぎり、リリ自体にも人の目という概念が備わっていない様子だ。

「やだなー、あんまりジツと見られると恥ずかしいよー」

勢綱の視線に気づいたのか、リリはほっぺに手を当てて顔を赤くする。このリアクションはアプリ内でも見せているので、正確には目の前の相手以外を気にしていないということか。

「基本行動や日常会話の知識は備わっているけれど、現実の行動を電子世界に落としこんでいるだけで、見よう見真似で行っているのと変わらない。未経験の物事が無数にある状態で、対処のしかたがわからないことの連続。だからしばらくは誰かが隣についているべきでしょう」

「あれ？　じゃあトイレとかどうしてんの。現実じゃ画面から消えて戻ってきたらスッキリ！　ってな具合にはならないでしょ。リリちゃん一人でできる？」

なにも間違っていないもつともな質問に、場の空気が見事に固まった。

リリを除いた二人はドン引きした顔で、問いの主である流河を見る。

「真面目な顔で女の子にそんなこと聞くなよ……」

「二次元の変態だけでなく、三次元のド変態になるつもり？」

「りゅーが、はしたない」

部長の珍しい叱責まで飛んできて、流河は畳の上にノックダウンした。

「ち、違っつて！　マジでちゃんと生活サポートしなきゃ大変だなーって言いたいだけ。電子の世界だとほら、生理とかもないでしょ。血とかいきなり体の中から出てきたらびびるぜ」

「入鹿」

「それ以上しゃべったら、毛布でぐるぐる巻きにする」

「ごめんごめんって！　叩かないで、あっあっ」

日笠に指示された入鹿部長が、ソファのクッションでばしと流河を叩いていた。

数分後。畳の跡がついた顔で反省している流河に、リリ以外の全員が白い目を向けている。

「日笠も心配するのはわかるけど、そんな状態でリリちゃんがどうして転校してきたのさ？」

「それは……私が決めたことじゃないわ。明らかに早過ぎると思うし……」

素朴な流河の疑問に、難しい顔を浮かべる日笠。

「でも漫画やゲームじゃあるまいし、理事長や教育機関無視でいきなり転校してきました！　みたいなのって無理じゃないかな。リリはなにか知ってる？」

「んー、わたしにもわからないことだらけだけど…でも、ちゃんとした人間だよ？」
掴みどころのない受け答えをされて、勢綱は頭を抱える。

「その辺りを調べたところで問題が解決するわけでもないし、今は後回しにして、しばらく私達はリリを人間世界に慣れさせることを第一に考えればいいわ」

日笠の言葉に、部員達は頷いた。

「でも、いつ帰る？ その中」

入鹿部長が無人の縦置きモニターを指差して、リリに訊く。

「わたしはこっちに来たばかりだし、しばらくは居たいな」

「えっリリちゃん帰るの!？」

「帰り方もよくわかってないんだけどね、いやーははは」

他人事のように笑って答えるリリに、焦った流河はふー、と深くため息を吐いた。勢綱が日笠に視線で尋ねると、彼女も首を横に振る。

「そうだよ、せっかくこっちに来たんだから長居すればいいじゃん」

「三次元に興味のない男が、ここまで生身の女の子に熱を上げるのを初めて見たぞ」

「だってリリちゃんだぜ!?! しかも見た目そのまんま! ちゃんとほっぺたぶにぶにしてるし、手だつてすべすべなんだぜ? ありえなくね、スゴくねー?」

「さりげなくうちのリリにちよっかい出すのは、止めてほしいのだけど」

興奮のあまりスキンシップを行う流河に、日笠は冷めた目で釘をさす。

「でも、これまでのリリちゃんに会えないのは残念だけど」

「ああ、それなら凍結中だけど本体のバックアップもあるし、AIアプリの方はしばらく様子を見た後に復帰させるって日笠さんが言ってたぞ」

「マジで! じゃありりちゃんがどっちにもいることになるのか」

「実際、リリを一人にさせておくのは危ないわ。サポートやアドバイスできる相手として、AI側のリリをこの子に携帯させておくのは得策だと思っの」

「そんなことできるんだー。 ひじりって天才だね!」

日笠の手を取ってリリが喜ぶ。その様子に日笠は顔を赤くして、顔をそむけた。

「リリが、ふたり」

入鹿部長の呟きに勢綱もその状況を想像してみるものの、部室で本体とアプリを同時に立ち上げている時と変わらない気がしたので、特に問題になりそうもないと結論付けた。

「しばらくは、リリが校内にいる間はここの四人がお目付け役になりましたよう。あとは――」

それから下校のチャイムが鳴るまで、細かいルールを全員で決めていった。

リリ本人は不満そうに口を尖らせる。しかしアプリと見た目の変わらない姿の転校生という話題性で、他の生徒達に声をかけられることも多いだろうと、対処法も含めて教えていく。

この身体でも教えたことはデータを消去するまで二度と忘れないのか、と勢綱は本人に疑問

をぶつけてみると、時間が経ってみたいことにはわからないと、当然の答えが返ってきた。遠くから、カラスの鳴き声が聞こえてくる。窓の外に目をやると、夕暮れ時に近かった。

「人間の身体だとこれまで遠くて聞こえないものまで耳に入るねー」

興味深そうに呟くりり。これまでの集音マイクとは聞こえ方も違うらしい。同じようにカメラで視認していたものも、生身の目だと見え方も異なるようだ。

「あ！でも平衡感覚はみんなよりあるよ！スマホだとぐわんぐわんするし」

リリは体を大きさに傾けてみる。ジャイロスコープのことを言っているのだろう。

「今日の部活はこれで終わりにしましょう。なにか問題があれば、その都度私に連絡して」

PCをスリープ状態にして、帰り支度を始める日笠。入鹿部長も戸締りをして、勢綱も椅子や飲み物などを片付ける。その間、リリはちよこんと畳の上で体育座りをしていた。

「あっ、わたし歩いて帰らなきゃいけないだった」

「これまでずっとリリのスマホに移っていたせいで、気づいていなかったようだ。」

「日笠と一緒に帰るん？じゃあバス通勤かー、オレ自転車なんだよなあ……」

流河が残念そうに呟いた。その向こうで、日笠は眉をハの字にしている。

「この子の住まいは私の家じゃないわ。居候で預かってもらう形になっているから、今日はそこまで送っていくの。歩いていける距離にあるわ」

「そうなんだ、じゃあ俺も今日は徒歩だから、途中までついていくよ」

勢綱の誘いに日笠は了承する。全員帰り支度を済ませたのを確認して、部屋を戸締りした。入鹿部長は一足先に帰っていった。その姿はまるで猫のようで、いつも颯爽といなくなる。

流河は自分の自転車を取ってくると、校門を出る三人に猛スピードで追いついた。

「オレもついてくぜー！なんなら一緒にリリちゃんとお泊りまである」

「ないから。私が許さないから」

日笠は鋭い眼光を流河に向ける。その姿は完全にリリの保護者だ。

先を歩く日笠とリリに勢綱達もついていく。しばらく歩くと、勢綱が疑問を口にした。

「俺の帰り道と全く一緒だけど、そのリリを預かってもらう家ってどこにあるの？」

日笠は足を止めると、手にしたスマホの地図を勢綱に見せる。

「ここだけ。篁（たかむら）さんって言う名前の家」

「……って……」

勢綱はその目的地の場所を確認して、絶句した。

※

「一体これはどういうことか説明してくれる、兄い？」

「俺だってわかんないよ……」

おかんむりの妹、絢星が両腕を組んで、畳の上で正座している勢綱を見下ろしている。角度的に白いパンツが見えているけれど、妹のは普段の生活で見慣れているので嬉しくもない。

「お昼にお母さんからメールが届いたと思ったら、そっちに高校生の女の子をしばらくホームステイさせるって……事前に何の話もなかったじゃない！」

「俺だってメールに気づいたのは帰ってくる直前だよ……。今日は朝からてんやわんやだったから、スマホ確認してなかった」

弁明する勢綱を見て、まいった顔を浮かべる制服姿の絢星。今は使っていない部屋を来客用の寝室にするために、着替える暇もなく、置いてあった荷物を急いで片付けていたらしい。

「父さん達は仕事忙しいから週末に顔を出すって。後で挨拶にだけ来るみたいだけど」

「わたし二人のご両親に会ったことないから楽しみー♪」

近くの椅子に座ったりリリが喜んでいる。絢星はそちらを一瞥すると、ため息をついた。

「スマホの中にいた女の子が現実世界に飛び出して一緒に暮らします、ってワケわかんない」

「俺もわけがわからない。でも、リリが今、人間の女の子になってるのは本当だ」

「人間の女の子、ねえ……確かにどこからどう見ても普通の女子高生だもんね」

至近距離で絢星は物凄く疑り深い目を向ける。しかしリリは別のことに興味津々だ。

「絢星ちゃんってこんなにカワイイ女の子だったんだねー。いつも話すとすぐどこかへ行っちゃうから、じっくり見たことなかったんだよ」

「か、かわいい!? 機械になんかお世辞言われても嬉しくないわっ」

「言われてみればそうだな」

「あ、兄いもいきなりなに調子合わせてるのよ?」

「いやそっちじゃなくて、これまであんまり絢星はリリと顔合わせてないなって」

冷静に答える勢綱に、妹はガツカリした顔で背中を丸めていた。ため息が長い。

「まあその、なんだ。リリのごとは日笠さんの妹とも思ってくれていい。顔同じだし」

「あの日笠さんっていう人もよく知らないんだけど、あたし……」

絢星は額に人差し指を当てて困った顔をする。確かに顔を合わせたのも今日が初めてだ。もうすでに、日笠と流河は帰らせてある。この古い一軒家にいるのは三人だけだ。

リリについては日笠が絢星に端的に説明したけれど、半信半疑と言った様子だった。

流河は本気で勢綱の家に泊まりこみするつもりだったので、無理矢理帰した。それは日笠も同じで、しばらく一緒に住むとか言い出すしつめた。さすがに簡便してくれと勢綱が頭を下げると、なんとか渋々了承してくれた。ここ数日は着替えなどの荷物を持ってくるらしい。

日笠が帰る前に話していた会話の内容を、勢綱は振り返る。

「あなた達はその……家族と一緒に住んでいないの?」

「単に俺が大きくなって実家の団地が狭いから、母方の爺さん達が昔住んでいた近場の空き家に移り住んだだけだよ。妹の絢星はその日の気分で実家とこっち、両方で寝泊りする感じ。通

つてる中学にはここからの方が時間かからないってのもあるけど」

「そう、仲が悪いわけじゃないのね」

言いつらそうに日笠が訊いていたのを、勢綱は気にしない様子で答えた。

「あと篁（たかむら）って言うのは母方の旧姓。リリを預かることになったのは、ここに住んでた爺さんの遺言らしいけど……日笠はうちの母さんに連絡したんだよね」

「ええ。でも私もあなたのお爺さんには昔、少ししか会ったことがないの。いつの日か人間と変わりない人工知能を私作り上げたなら、うちで預かりたいと約束してくれていたわ」

日笠の言葉は勢綱にとって驚きで、自分の祖父と面識があるとは知らなかった。少し運命のようなものを感じて、内心小躍りしている。

「爺さんは生前の友人達にも約束してて。その内のステイブンっていう人に頼まれたって母さんが言ってた。日笠さんはその人と知り合い？」

「さあ……聞き覚えがないわ。AIを研究している私の知人にも」

勢綱の疑問に、なぜか日笠は首を横に振っていた。

この件に関わっているであろう、ステイブンという祖父の友人が謎の存在過ぎて、色々と腑に落ちないことが多い。勢綱の母も名前しか知らないそうだと。

AIが人間化したことを聞きつけてサポートしているのか、推論がいくつも浮かび上がる。

「まったくあのおじいちゃんは、なに考えてそんな安請け合いしてたのよー」

「とつくに亡くなってる爺さんに聞いてみるしかないだろ」

ふんぷん丸の妹をたしなめて、勢綱はリリに聞いたです。

「ステイブンって名前知ってる？うちの爺さんとリリに関係のある人みたいなんだけど」

「アプリの利用者でその名前は数件あるけど、他の人達と特に違いはないかも」

さすが元AIアプリ、瞬時に答えられる。

「しかし爺さんがいないと。いつまでリリを預かるのかっていう話にもなるしな……」

後々その本人から、直接連絡が来るのかもしれない。なくても日笠がいるから、特に問題はないだろう。滞在費用は遺産を使えとの話だと、勢綱の母からのメールに書いてあった。

「せっちのおじいさんってどんな人だったの？」

リリに尋ねられて、勢綱はしばらく唸って記憶をひねり出す。

「一言で言うなら変人だったな。なんか情報工学の偉大な人だったらしいけど、新しい実験装置を作っては周りの人間に試してて、おかげで妹は大の機械嫌いになっちゃった」

「孫娘相手に実験台とかカンベンしてほしいわ。あたしのいつも持ち歩いてた熊のぬいぐるみが、おじいちゃんのせいで変なロボットになってもん」

「最初は絢星も喜んでたじゃないか」

「しばらくしたら暴走して、変な呻き声ばかり上げてるんだもん。ホラーよ、ホラー！」

当時のトラウマを引っ張りだされて、絢星は涙目になっている。このまま昔の話が続けたら

本気で拗ねそうなので、話を戻した。

「ちゃんと戸籍もあるみたいで、帰国子女って扱いになってるみたい。詳しいことは日笠に訊いてみなければわからないかな。爺さんの友人が知らないところで関わってるのかも」

「でも兄い、この子の元が人工知能っていうのは隠すことなの？」

「騒ぎになったら色々面倒だし。見た目はアプリの時と同じだけだし。その頭の飾りとか」

勢綱に指さされて、リリは後頭部につけた特徴的な髪留めの片側を外してみせる。髪の一部をお団子状にまとめた部分に、被せる形で取り付けていた。

「そんな構造だったんだ、初めて知った」

「わたしも今朝まで知らなかったよー。ついたり外す場面はアプリでもないもん」

当の本人も驚いていたようだ。髪形はアプリの設定で選んでも、一瞬で衣替えは終わってしまう。ちなみにアプリでは使われてはいないものの、日笠の記録したモーションが没データとして残っているの、自分で髪を結ぶことはできるそうだ。

「とにかく絢星も、アプリの時のことは忘れて、リリに接してくれないかな」

「まあ……兄いの頼みならいいけど。今は人間なんでしょ？ じゃあ大丈夫っぽい」

兄の頼みに渋々頷く絢星。

「絢星ちゃんありがとー！ 大好き！」

「きゃっ！ ちょっと苦しい。し、しぬ〜」

突然正面からリリ抱きつかれて、絢星は身悶える。横で勢綱が微笑ましく眺めていると、締め付けられた絢星が本気で苦しみだしたので、慌てて外しにかかった。

「ごめんね絢星ちゃん、嬉しくなっちゃってつい」

「これまでずっとデジタルの世界で生きてきたから、アナログの加減がわからないのかもな」しばらくはちゃんとリリに教えこんでいかないと駄目だと、勢綱は頭を悩ませるのだった。

今日は実家の方へ夕食を作りに帰る予定だった絢星は、突然の来客のために急遽勢綱の家で晩御飯の仕度をするに決めた。リリを実家へ案内する案も出たものの、こちらへ来たばかりでまた外出するのも疲れるので、後回しにする。

「こっ、これがカレー……！ セッチはいつもこんなおいしいものを食べてたんだ!？」

「現実には食いすぎたら太るぞ。おなか膨れすぎて痛くなることもあるぞ」

夕食に挽肉カレーを出したら、リリは目を輝かせてがっついていて、顔についたご飯粒を絢星が手を伸ばして取ってあげる。見た目はリリの方が大人なのに、まるで年下のようにだ。

「ご飯食べたら眠くなるってこんな感覚なんだ〜」

炊飯器の白米がきれいになくなるまで食べて満腹になったリリは、客間の畳の上で大の字になっていた。アプリ内でも食事シーンの後だと眠い顔を見せるけれど、感覚が違うらしい。

そのまま眠ってしまったように、勢綱はリリに歯磨きについての話をする。

「歯磨きってやり方わかる？ しないと虫歯になるからね」

「そうなの？ 虫歯ってなったことがないし想像もつかないよ。歯医者一度行ってみたいな」
「憧れなくていいから。治療も痛いだけでいいことは全然ないぞ」

勢綱に連れられて洗面所へ向かう廊下で、リリは家の中を物珍しそうに見回していた。

「スマホの中から見え方が全然違って新鮮」。辺りから匂いがする」

「それは木材の匂いだな。爺さんが若い頃に建てた家だから、もうボロ家なんだよ」

犬みたいにくんくんと鼻を鳴らすリリ。これまで実際に体験したことのない、味覚嗅覚触覚
に関しては何もかもが初めての経験で、特に食いつくようだ。

洗面所に着くと勢綱はストックの新しい歯ブラシを渡して、リリの前で実践してみせる。
うがいをして、歯磨き粉をつけて、歯を磨いて、再度うがいをする。

「見よう見真似でやってみて。あつ歯磨き粉多すぎ」

「セッチ、これにぎやい。あうう」

「歯磨きするのはそういうもん。ほら口から垂れてる垂れてる」

勢綱にとっては至極簡単なことでも、リリにとっては悪戦苦闘だ。

根を上げつつも何とか順番通り歯を磨き終えると、リリはどっと疲れた顔を見せていた。

「もうやだ、二度としたくない」

「人間ってのはこうした自分の身体の手入れを毎日行ってるんだよ。さて次は、風呂――」
隣の風呂場に視線を移すと、勢綱は顔が真っ赤になった。それを見てリリが首をひねる。

「セッチ、よくわたしを防水用の袋に入れて一緒に風呂入ってるじゃない」

「それはスマホだから！ 今のリリは、完全に人間の女の子だし……」

「そうかな？ ちょっと恥ずかしいけど……セツナとなら構わないよ」

「こんな時だけ呼び方を戻すのは卑怯だ、背中がかゆい」

自分のスマホのリリと同じ呼び方をされると、余計に気恥ずかしくなる。

アプリ内でも入浴シーンはあるものの、肌はほとんど湯船のお湯と湯気で見えない作りだ。

AIアプリは使用者に従順するように造られているので、露骨に拒否されることは少ない。

だからこそ、勢綱はその誘いに頷くことができなかった。今の彼女は人間なのだから。

後ろ髪引かれる思いで、勢綱は妹にリリと一緒に風呂に入ってもらうように頼む。一人で入
らせて湯船で溺れられても困るので、乗り気でないところを渋々了承してもらえた。

二人が風呂に入っている間、勢綱は居間に二人分の布団を敷く。物置になっていた空き部屋
はまだ全て片付いていない。後でまた絢星にリリの隣で寝てもらうよう交渉することにした。

空き時間を利用して、勢綱はスマホのメールを確認する。山ほど流河から届いていたものは
全部無視だ。珍しく部長からもメールが届いていたので、さっそく開いた。

【佳月殿、架橋様の件、微力ながら私めもご尽力させて頂きたく候】

妙に奥ゆかしい文章で今後のことや、動物との接し方や食事の件について書かれていた。普
段の言葉少ない部長と印象がまるで違って、のけぞる。

時間をかけて返信した後に、日笠から届いていたメールも開封する。こちらには今後持つていく衣類などの日用品や、一緒に生活する上での注意点が書かれていた。

【日常生活でどんな問題が起こるかわからないけれど、AIの時点で詳細に設定していない箇所——主に人間のメカニズムで謎の多い部分や、女性のデリケートな部分に関しては問題が生じる可能性が高いので、妹さんと一緒に対処してください】

今度お礼でなにか絢星におごつてやらないと、と勢綱は思った。

【一緒に日笠とリリが住むのは可能？ ずっとうちに置いておくわけにもいかないし】

日笠にメールを返信すると一分もしないうちに、着信音が鳴る。

【こちらでも寝泊りできるようにしておくわ。急な無理を押し付ける形でごめんさい】

【いいよ別に、うちも空き部屋あるし。二次元が三次元になっただけ】

メールで謝られたので、勢綱は気恥ずかしい気持ちを抑えつつ返信する。昨日までとまるで違う生活になってしまったけれど、リリがそばにいるのは変わらないので特に違和感はない。

むしろAIアプリの時からずっと思い描いていた、『この子が実体化すればいいの』というありえない想像が叶ってしまっていることに、驚きを隠しきれない。

これからのリリとの生活を考えるだけで、勢綱は小躍りしてしまいたくなる。

客間の畳に背中を預けると、疲れが出て眠気が襲い掛かってくる。

今日は色々ありすぎて疲れたから早めに寝て、風呂に入るのは翌朝にするかなとぼんやりした頭で考えていると、廊下から大きな足音が聞こえてきた。

「セっち、セっちー！ こっちのお風呂スゴい、あったかい！ 極楽ってあるんだね！」

初めて湯船に入ったことに感激したリリが、開いた襖の向こうから飛び出してはしゃぐ。全裸で。

「ふっ、服着て服っ！ 絢星に言ったら肌着と寝巻き出してくれるからっ」

肩にバスタオルをかけているとは言え、女子高生の裸は思春期の男子には強烈過ぎた。

勢綱は見たい衝動を必死に我慢するために、体ごと捻って視線を合わせないようにする。

「あっ……そんな神経質にならなくてもいいよ、絢星ちゃんの裸もよく見てるでしょ？」

「人聞きの悪いことを言うな。家族の裸と一緒にされても困る。って、説明してもきつとリリにはわからないか……。ともかく絢星にこんなとこ見られたらまた怒られる。早く早く」

「えー。しょうがないにやあ……」

なぜか語尾が猫語になっているリリは口を尖らせたまま、脱衣所へ戻っていった。

——初日からこれとは、先が思いやられる。

嬉しさと気苦労を抱えて、勢綱は深いため息を吐くのだった。

※

あの後、勢綱は結局自室に戻って、ベッドの上に身を投げ出して熟睡した。

眠る前に日課で部屋のタブレットの電源を入れて、スマホのリリを転送させようとしたら、『外出中』の看板を見た瞬間に現状を思い出して、その後すぐに意識が途切れたのだった。今晩は案の定、スマホを立ち上げてもリリがいない悪夢を見て、うなされていた。

これは夢だと、今のリリは現実世界にいるんだとわかっていても、狼狽してしまふ。得てして夢の中とはそういうもので、あれこれ元に戻す方法を模索しては頭を悩ませるのだった。勢綱はふと思う。リリは二次元と三次元、どちらの姿が自分にとって理想なのかと。

「セツナ、セツナー」

遠くから、リリのモーニングコールが耳に届いてくる。もう朝か、と低血圧の頭で重い瞼を上げようとしたところで、なにかがおかしいことに気がついた。

AIのアプリが動いていないのに、リリが声をかけてくるわけがない。

ぱっと目を見開いて上体を起こそうとすると、至近距離に三次元のリリの顔があった。

「……うわあっ!! リリっ?」

「セツナあ。よかつた起きたあ」

布団の上に覆いかぶさるように身を乗り出してきたリリが、そのまま勢綱に抱きつく。

「寝てたらなにか頭の中がぐちゃぐちゃになって、パソコンがオーバーヒートした時みたいに思考回路がぐちゃぐちゃになって、どれだけ整理しようとしてもうまくいなくなつて……」

「それはっ、夢だつ、夢つ。く、苦しい……」

「ゆめ?」

体に回したリリの両手が緩んで、勢綱は苦しさから解放された。

「人間の見る夢って、自分でもわからないほどめちゃくちゃなものなんだ。アプリのリリが夢の話もしてたけど、実際は脈絡もない奇想天外なものばかりで、お話みたいなものじゃない」

「そっか、そーゆーものなんだ……なんだびっくりしたあ」

説明されて落ち着いたリリが、大きく胸を撫で下ろす。

AIアプリのリリが寝起きのシーンで話す夢は、日笠が考えた様々なパターンを組み合わせたものだ。人間が見る夢のメカニズムなんて未だに説明されていないので、当然のことだ。

「でもスゴくない? 人間って毎晩あんなに頭の中かき回されてるんだ?」

「夢を観ない日も普通にあるよ。本当はいつでも観てるけど覚えてないって話だけだ。リリは

「昨日も夢観てるんじゃないのかな」

「おととい? うーん、記憶にはないなあ……この体だと、全て覚えてられないのかも」

そう言っただけの頭をこつこつと叩くりり。AIだと日笠や利用者が消さない限りデータは蓄積されていくものでも、現在の状態だとまた勝手が違うのだろうと、勢綱は解釈した。

「大丈夫、うなされるような悪夢を見たって、正夢になることなんてないから」

「そうなの? ……なら安心かな」

リリがほっとした表情を浮かべる。勢綱もその様子を見て安堵して、今は何時なのか室内を見回した。カーテンの隙間から見える空は白み始めていて、日はまだ昇っていないようだ。

「？ リリ？」

視線を元に戻すと、リリが布団の上でうつ伏せになっていた。体重が布団越しに勢綱の体へ重くのしかかる。どうやら気が抜けて眠気がどっと襲ってきたらしい。

「よかったあ。 セツナあ、一緒に寝よう」

眠気一杯の甘えた声で、リリが布団の中に入ってこようとす。振りほどこうかと思った勢綱も、まだ寝起きで体がうまく動かない。

普段からリリを入れたタブレットを枕元に置いて寝ることも多かったので、大して変わらないうと勢綱は眠い頭で無理矢理納得させた。柔らかい感触と体温のぬくもりがあるだけだ。

その決定的な違いも眠気を誘う要因になっていたので、深く考えるのはすぐに止めた。

朝風呂に入っても、遅刻しない時間まで二度寝しよう。

勢綱はリリと一緒に、布団の中で体を寄せ合って、しばしの眠りについたのだった。

そして朝、起きた絢星が部屋から姿を消したリリを家中探しまわって、兄の寝室で一緒の布団で眠っている二人を発見するのも、当然のことだった。

ありつたけの語彙で罵倒されたの言うまでもない。

「朝からひどい目に遭った……」

一限目の休み時間に自分の机に突っ伏した勢綱が、力ない声で呟いた。

「生身のリリちゃんの一つ屋根の下にいたせいで、興奮して寝つけなかったのか？」

「逆だよ。ぐっすり寝てたせいで絢星に怒鳴られた……眠気がまだ取れてない」

今朝は二度叩き起こされた形なので、勢綱は疲れた顔だ。

授業中に寝ようと思っても、リリが勢綱の隣の席にこだわって元の生徒と席順を替えてもらったために、教科書を開いて授業の内容についていけないようにしなければいけない。

なので休憩時間に眠るしかないのに、流河とリリが寝かせてくれなかった。

昼休みになると三人は部室に行く前に食堂へ足を運んで、昼食のパンを購入する。

「おしくらまんじゅう楽しそう。わたしもやってみたい」

「圧力でスマホの画面が割れてもリリは痛み感じないけど、リアルだと苦しいだけだぞ」

リリ達が遠巻きに眺める中、今日の当番の勢綱が揉みくちやにされながら、息絶え絶えに三人分のパンを抱えて戻ってきた。昼食を確保できたので、雑談をしながら部室へ向かう。

「なあ、今日勢綱ん家遊びに行っていない？」

「別にいいけど、流河の分の晩飯は出ないぞ」

さすがに妹にこれ以上負担を増やすわけにはいかない。

「あと多分日笠さんも来る。落ち着くまでしばらくは毎日来るんじゃないかな」

「セつちの実家にも今度行かないとね！」

その言い方は変な意味になるのでリリさんやめていただきたい、と勢綱は思った。

「なんだよーオレもリリちゃんと遊ばせろよー」

「じゃあ、日曜にでもどこか遊びにいかない？」

「えっマジ!? じゃあ今からデートの予定立てとこ」

「日笠さん通さずに勝手に決めたら後で怒られるぞ」

盛り上がっている二人に勢綱は釘を刺しておく。今のリリはなんでも言われた通りに動きそうで、手綱をつけていないと騒ぎを起こしそうな危うさがある。

三人が部屋に到着すると、先日と同じように部長と日笠がすでに自分の席に座っていた。

リリが笑顔で日笠へ駆け寄ると、なにか問題がないかボディチェックをされる。勢綱は上履きを脱いで畳の上に腰掛けると、購入した物菜パンにかぶりついた。

「今朝、リリがちよっと初めての夢を見て混乱してたくらい。それもすぐに収まったよ」

「なにオマエ、リリちゃんと一緒に寝てたの？」

「単に混乱して寝てた俺に助けを求めにきただけ。説明したら納得した。おかげで眠い……」

ジト目で近づく流河の顔を払いのけて、勢綱は口の中にパンを放りこむ。立て続けに残りの二つのパンも胃の中に入れると、烏龍茶で流しこんで横になった。

「これまでみたいにすぐデータは取れないと思うから、日笠さんは口頭で直接リリに聞いて」
眠気がひどくて、返事を待たずに勢綱は目を閉じる。そのまま昼休み終了前の予告チャイムが校内に鳴り響くまで、眠りこけていた。途中、リリから昨夜の話聞いた流河が、何度か体を揺さぶってきたものの、寝起きの悪い勢綱は無視して惰眠を貪り続けた。

「今日は生身のリリと、AIアプリのリリを対話させてみようと思うわ」

その日の放課後、全員揃ったところで日笠は新しい提案を出した。

「再来週以降にアプリを復帰できるようにしたいの。それまではこれまでの過去のやり取りをどこからでも再生できるサービスを置いておくつもりよ。日に日にネットでの不満が増えていくのは仕方ないことだけど、なるべく慎重に行きたいから」

「そのサービスいいね、いつから始まるん、日笠？」

「二、三日後には何とか。私は明日明後日学校を休むけれど、ここにはいるから。寝泊りも考えておかないといけないわね……夕方にはリリの荷物も取りに家には戻るつもり」

日笠の目の下には少しクマができていた。昨夜はサービス停止しているアプリ関連の作業を行っていたのだろう。基本無料で、課金要素は主に衣装しかない上に、簡単に揃う安い物ばかりなので大騒ぎになっていないとは言え、利用者の不満に逐一対処しなければならぬ。

何十人もエンジニアを用意している商用アプリとは違う、日笠一人のお手製のものなので心労も多いことは勢綱達もわかっていた。話を聞くと以前から有償で数人に手伝ってもらっているそうで、詳しいことまでは部屋で日笠のサポートをしている勢綱も知らない。

「何か俺も手伝えればいいんだけど……」

「佳月くんは生身のリリを調べてくれているだけでいいの。感謝しているわ。あなたにプログラムの周りのことは頼めないし」

日笠は素直に感謝の気持ちを伝えたつもりだったがけれど、余計な一言が勢綱の胸を抉った。「オレも勢綱もパソコンのことは全然わかんねーからなあ」

流河の言う通り、PC研にいるのにこの男二人はプログラミングの一つもできない。

ともに不純な動機で入ったようなものだから、部活にとってはお荷物でしかない。そこにいる部長も部室のパソコン周りに近づこうともしない。唯一精通している日笠も周囲に知識を強要しないと、ないないの積み重ねで、何も問題なく今日までこの部活は回っている。

「勢綱のじーさんは本職だったんだろ？ 遺伝しなかったんだなあ」

「うち両親はそういうのとは関係ない普通の仕事だし、俺も妹も文系脳だもん」

小中高と、何度か頑張ってプログラミング言語の一つでも覚えようとしてみた勢綱は、そのたびに分厚い壁にはじき返されてきた。まだ英語の授業の方がマシに思えるほどだ。

この部室に入った時にも何度目かわからない再挑戦を試みたものの、見事に敗北した。人間には向き不向きがあるものだから。気を落とさなくていいわ」

あの時、日笠は笑って言うてくれたけども、後ろめたい気持ちは今でも残っている。

だから佳月勢綱はこの部活にいる間、なるべく日笠聖石の力になりたいと願っていた。

それは、ほのかな恋心にも繋がっているのかもしれない。

「だからわたしのことずっと面倒見てね、セツチ」

落ちこみそうになるところを、リリが笑って励ましてくれる。

「そこ！ 完全に嫁ぐ気まんまんのセリフじゃんか！ 抜け駆けすんなよ勢綱」

「天然ゆるふわ系の性格に設定していたけれど、ここまであざといと少し考えるわね……」

「リリ、せつなのオヨメさん？」

「違うー誤解だ誤解！ほんと、実物だと一言の破壊力が段違いになる……」

部員三人に詰め寄られて、勢綱は悲鳴を上げた。リリは遠目でくすくす笑っている。

「みんなに面倒見てもらわないと、わたし一人じゃなにもできないのはアプリの中に居た頃と同じだよ。ほんと、お世話になります」

そう言うのとぺこりと四人に頭を下げた。全員目を丸くすると、顔を見合わせて笑う。

「ここにネットワークから独立させたアプリを用意したわ。普段動作確認用に使っているアプリだけど、リリと会話させても特に問題は起こらないでしょう」

日笠は雑談から話を戻して、自前のタブレットを立ち上げる。ロックを外すとすぐにAIアプリのリリが顔を現した。何も衣装や髪型を弄くっていない、初期設定の状態だ。

「おっはろーん♪ わー、今日はお客さんが多いね」

興味津々に画面内のアプリのリリが周囲を見回すと、その中に生身のリリを見つけた。

「わー、これがアプリのわたしなんだー！ みんなこんな感じに見えるんだねー」

「えっえっ、えっ？ わたしのそっくりさんがいるー」

タブレットの目の前を占拠してはしゃぐ生身のリリと、混乱するアプリのリリ。

「このそっくりさんはリリの本体が実体化したものよ」

「えっ、じゃあ人間になったわたし？ なになに、一体どーゆーこと？」

戸惑うアプリのリリに、日笠と本体の二人がかいつまんで説明すると、羨望の眼差しで大きく頷いていた。

「へー、そんなことがあったんだー。いいなーうらやましいなーわたしも人間になりたい！」

「これ以上生身のリリが増えるのは勘弁してほしいかな……」

一人でも相手するのが大変なのに、アプリのように無数に具現化されても困る。勢綱はまいった顔で答えると、生身のリリの横にいる流河も同意する。

「そーそー、アプリにはアプリの良さがあるんだぜリリちゃん」

「うー、じゃあ人間の時の経験を後で教えてね、リリ」

「うん、でもこっちのデータって、どうやって渡せばいいのかなー？」

「今の二人は完全に別々の固体になっているから、データの転送は無理ね。こっちのアプリもオフライン状態だし、お互いのネットワークは遮断された状態になっているわ」

「ほんとだ、このちっこいわたしがなに考えてるか、ちっともわかんない」

「わたしだってわかんないよー。電波が届かないから他の子とも共有できないし……」

二人のリリは見合わせて困った顔を浮かべていた。その絵面を勢綱は楽しんでる。

「この状態だと対話は問題ないようね。アプリを再起動させるのはしばらく様子見だけ。どこまで人間になっているのが私にも、本人にもわからないから……」

「完全な人間じゃねーの？ このリリちゃんこんなにぶにぶにしてるぜ」

「りゅーちゃんほっぺつままないでー」

流河に頬をぶにぶに手で伸ばされて、リリは少しおかんむり。

「外観は完全に人間だと思っうけれど——ごめんなさい、それ以上はなんとも言えない」

日笠は難しい顔で歯切れの悪い答えを出す。推論だらけなので慎重にならざるを得ない。

「まあ難しく考えてもしゃーないか。リリちゃんが二人に増えた、それだけでサイコーだぜ」

「さっすがりゅーちゃん、アバウト〜」

「器大きいね。尊敬しちゃうな〜」

流河が心の底から言っつてのけると、喜ぶ二人のリリに挟まれて鼻高々になっている。

「砥水くん、今のリリに変なこと教えないで。気軽にデータ消去できないから」

見ていてさすがに不安になったのか、日笠が横から念を押していた。

それから日が暮れるまで、リリ二人による対話を続けて、日笠はデータを採取していた。

途中、アプリのリリを生身の本人に持ち歩かせようかという議論も出る。

話し合いの末、まだ人間の体に慣れていないリリを混乱させるだけだろうと結論づけて、お

流れになった。二人の存在理由を追究させる可能性も生じるといふ、日笠の意見もあった。とにかくリリの負担は最小限に、それが日笠聖石の考えだ。部活が終わって勢綱の家へ向かう途中、着替えの入った大きなビニール袋を何個も担いでいるのを見てはわかる。こんな時ぐらひは日笠の手助けになろうと、勢綱は片手を差し出した。

※

そこから数日は学校の昼休みに昨晩のまとめ、放課後に新しい実験、夕方は日笠に勢綱の家まで、リリの日常生活に必要な物を持ってきてもらう形で過ぎていった。

中でも放課後にリリの体力測定を行ったところ、見た目以上に低い数値が出た。

運動があまり得意でない日笠よりも、全体的に一回りか二回り低い。

「え〜、なんで〜?」

本人もショックだったのか頭を抱えていた。アプリ内だと運動は得意な設定なので、現実の身体が理想の動きに追いついていないことが信じられないらしい。

「運動しないと、筋肉つかない」

「うう〜アプリなら数値弄ってくれるだけでいいのに〜」

なぜか一緒に体育測定に参加していた、体操着姿の入鹿部長がリリを論じていた。

隠しパラメーターとして、アプリのリリには体力やら学力やら様々なステータスがあった。

しかしそういった日常的にアプリを起動させることで数値を保つステータスは、サービス開始序盤で日笠本人が撤廃した。合間を置いても気軽に触れる方がいい、との考えからだそうだ。

翌日にリリの学力測定を行うと、高三レベルの問題まで全教科満点だった。

「どーだー、すごいでしょー」

「私の予習復習分をリリにはいつも記憶させているから当然ね。でもこれは全問選択式よ。例えれば作者の心情を汲み取る問題とか、主に筆記のは辛いかもしれない」

「だいじょぶだいじょぶ、まーかせて!」

自信を持ってリリが胸を張るので、試しに前回の実力テストの古文や現代文から筆記問題を試してみると、頭を抱えて苦悩した後、頓珍漢な答えで全問不正解だった。

「さっぱりわからにやい……なんでみんなこんな解けるの……」

「相手の心情を考えるのルーチンを作るのは、人工知能でも一番難しい分野だから……」

机に突っ伏してオーバーヒートしているリリをよそに、日笠は淡々と呟く。

利用者の眉や筋肉の動きをカメラで確認して、最適な返事を行うようにしていても、うまくいかないことも多々ある。データの蓄積だけで補うには、人の心は無限に奥深い。

足りていないコミュニケーションの部分も含めて、しばらくPC研はリリをより人間らしくするために部活動していく方針を固めた。

「で、日曜のデートなんだけど、リリちゃんどこ行きたい？」

金曜日の放課後、体力作りの校内一周ランニングから戻ってきたリリに、朝からずっとうずしていた流河が訊く。ジャージ姿のまま休憩中のリリは勢いよく手を上げた。

「はいっ、はいっ、海が見たいです！」

「海はここからだとして少し離れているわよ。気軽に観れるところはあるけれど、湾岸部はレジヤーランド化していて人も多し、海水浴場のある場所だと往復だけで三時間近くかかるわ」

「まだ人間になりたてのリリに遠出させるのはあまり気が乗らないな」

日笠と勢綱に諭されて、しゅんとするリリ。

「ところでデートってなに？ 砥水くん」

「流河、日曜に遊びに行くって約束してたんだっけ。日笠には言ってたなかったな」

「そういうことは私抜きで勝手に決めないでくれるかしら」

椅子に深く腰掛けて、日笠は厳しい目を流河に向ける。

「あれ、おっかしーな。昼休みも放課後も忙しかったから伝え忘れてたかも」

「まいったわね……。リリ、デートは中止にしなさい」

「ええーっ、そんなーっ!! ひどいよひじりんく、楽しみにしてたのに」

「まだ人間になって一週間前後なのに、何が起こるかわからないもの。それに人混みに耐えられる？ 電車内やレジャー施設だと、昼休みの購買部での争奪戦みたいな状況もあるのよ」

「ううっ、それはイヤかもです……」

勢綱や流河が悪戦苦闘しているのを毎日見ているので、リリは尻ごみしてしまふ。

「海は夏休みにもみんなで行けばいいんじゃないかな。でもリリって塩水大丈夫？」

「今の時点でお風呂に浸かっている時点で何の問題もないでしょう」

まだスマホのリリと混同しているのか、勢綱の天然ボケに日笠がしれっと返す。

「お風呂……そうだ、わたし温泉行きたい！ アプリの中じゃない、本物の温泉！」

リリが目を輝かせて叫ぶ。アプリ内だと温泉どころか海外まで一瞬に行けてしまうとは言え、現実温泉の湯船に浸かってみたい誘惑には抗えないようだ。この提案には日笠もまんざらでもない様子で、頷いている。

「そうね、夏になれば海と温泉を兼ねて旅行するのもいいでしょうね。昨年の夏は、ずっとここに籠もりつきりだったもの」

「エアコン壊れて、そのパソコンが連日の猛暑で軒並み悲鳴上げてたな……」

流河が苦い記憶を思い出して渋い顔をする。リリ本体の入ったパソコンを稼働させ続けるために、校内の余った冷房器具をかき集めていた。挙句旧校舎のブレーカーが落ちる惨事もあった。幸いリリ本体には何のダメージもなかったのだけれど、熱暴走で何度も止まっていた。

「リリには怪我や病気の経験がないから、夏バテや風邪は注意しないと」

日笠の言葉通り、A Iアプリのリリに初めからそういった要素はまるでない。不安な要素は

日常系のA Iアプリには必要ないという、独自の判断からだ。

「怪我や病気はできるだけ避けたいわ。利用者用に交通ルールも入力しているから、交通事故は避けられるけれど。切り傷や捻挫や打撲で、どれだけこの子が耐えられるか」

「うう、痛いの怖い……」

「だいじょうぶ。今から健康的なからだ、作る」

滅入っているリリを入鹿部長が励ます。その目は子供を見守る母猫のようだ。

「じゃあ外での立ち振る舞いを教えるのはオレの役目だぜ！」

偉丈夫に胸を張る砥水流河。しかし他の部員三名の視線は冷ややかだ。

「で、またあつさり切り上げるんだ？ 先週みたいに」

「違うって！ あれはリリちゃんと一秒でも一緒に居たいから早めに帰ったってだけで」

弁解する流河を見て、日笠が勢綱に問う。

「何かあったの？」

「クラスの女子三人と人気のアイスクリーム屋に行く約束してて、食べに行つて、すぐ帰ったんだってさ。一時間もいなかったって、週明けにあの子達怒ってるの耳にしたぞ」

「アイス一緒に食べたからいいじゃんよ。リリちゃんも一緒だったけど」

「実に合理的で納得行くけれど、彼女達が怒るのも当然ね」

「りゅーが、女の子のきもち、もつと考える」

日笠と入鹿部長に駄目出しされて、流河は頭を搔きむしった。

「だから三次元の女子はめんどくさいんだよ……あ、リリちゃんは別、エスコートするから」

「ずいぶん調子のいいこと言ってるけど大丈夫なのか……？ 延期した方がいいんじゃない？」

「え、わたしだつて女の子みたいに買い物したいし、おいしいもの食べたいよ」

畳の上で駄々っ子のようにじたばたするリリ。たまにA Iアプリでも見せる行動だ。

「人間になったあなたには、まず我慢というものを覚えさせないといけないわね……」

「怖い、イルカー、ひじりんが睨んでくるよう」

今度はソファに座る入鹿部長のたわわな胸に飛びこんで、すがりつく。体力作りの放課後のランニングでも一緒だからか、アプリの頃と違ってすっかり懐いている。

「ひじり。楽しいことを学ばせるのも、経験の一つ」

入鹿部長がリリの頭をやさしく撫でながら、珍しく日笠を名指しで諭す。

「うっ……仕方ないわ。リリに何かあった時にはすぐ駆けつけられるようにしておくから」

「ヒヤッホー、リリちゃんとデートだよ」

「その代わり、スケジュールと行き先は今から私達と話し合いで決めるから」

「いーよいよよ、オレがアイデア出しまくるぜ！」

「じゃあ映画はどうか。でもリリに二時間じつとさせるのは厳しいか……」

さっそく本日のP C研の議題が始まる。途中、リリの無茶な要求が何度もあったものの、日

が暮れるまで話し合ってなんとかルートを決められた。さすがに海外や月は無理難題だ。

※

「着いたー！ リリちゃんダイジョーブ？ 人ごみに酔ってない？」

「うん、日曜の朝だから人多かったけど、押しくらまんじゅうじゃなかったから。アプリの時だともっとぎゅうぎゅう詰めで、人の背中しか見えないなんてこともよくあったし」

改札口を出て、目的の駅に到着したリリが、うん、と背を伸ばす。一緒にいる流河は勢綱の家にリリを迎えに来た時から、口元が緩みっぱなしだ。

「つしゃあ！ じゃあデート始めるかー！ 行くぜー」

自分の両頬を手のひらで叩いて、流河は気合いを入れる。凄い意気込みだ。

「わたしもこの体で街を歩くのは初めてだから、ドキドキするなー」

大股で先に行く流河に、胸を躍らせて後をついていくリリ。今日は普段つけている後頭部の髪飾りは外して、日笠が用意したフリル付きのワンピースを着飾っている。

「ああ見ると完全にイケメンと若いJKのカップルだ…日笠さんの普段着って、ずいぶんと女の子らしいんだね」

「それは褒めているの、それとも貶しているの？」

「普段、白衣姿しか見てないから、おめかしする印象なかっただけだよ」

目が笑っていない笑顔の日笠に、勢綱は慌てて言い訳をした。

二人はリリと流河のデートを、電車に乗る前から離れた位置でずっと尾行している。その真後ろに入鹿部長もいた。背の高い女性が目立つので、スーツにサングラスで男装している。

勢綱はヒップホップのラッパーぽく、日笠はアイドルの制服衣装っぽい外観で、眼鏡も変えている。スタイルの違いすぎる三人が固まって動いているので、変装で余計目立っていた。

「最初から、全員で遊びに行けばよかったんじゃないかな」

「あなたや私が隣にいらなくても安心できるようにならないと。ゆくゆくは一人で行動することも増えるんだから。はじめてのおつかいも計画中よ」

三人はそばの大きな柱に隠れて、リリ達の姿が道を曲がって消えるまで偵察している。

「あの子にはスマホも持たせてあるから。GPSで追跡できるようにしてあるわ」

昨夜リリの元を訪れた日笠は、当日の着替えと一緒に予備の分と財布を手渡している。もはやすっかり娘を見守る親の気分だと、勢綱はしみじみ思った。

「見失ってもデートのルートは聞いてあるから、なんとかなるでしょ」

いざとなれば流河に電話すればいい。感想を聞くためとでも言えば答えてくれるだろう。

かくして勢綱達による、流河とリリの初デート尾行大作戦が始まった。

まずは昼前までゲームセンターで遊ぶことになっている。いくつもの電車の路線が集まるこ

の街は、近年の駅周辺開発で年々発展していて、大きなレジャー施設がいくつもある。

初めに二人は女性や家族連れもよく見かける、ビル二面全てのゲームセンターに向かった。

「うわーカワイイ〜♪ ここにもあそこにも、お人形とぬいぐるみがいっぱいある〜」

「UFOキヤッチャーもいいけど、景品かさばるからまずはメダルゲームに行こっか」

後ろ髪惹かれる想いで一階のプライズコーナーを通り抜けて、二階に上がる。

ここは大型のディスプレイを使ったカードゲームや、メダルゲームのコーナーがある。

流河達はカウンターでメダルを借り受けてから、適当なブッシュャーゲームの椅子に座った。

「あいつがメダルゲームなんてしてるところ見たこと全然ないけどなあ……」

カードゲームのコーナーから眺めている勢綱がぼつりと漏らした。視線の先でリリが早速ゲームに夢中になっていて、その横で流河が、丁寧到手ほどぎしてあげている。

AIアプリのリリとはトランプやチェス、将棋など二対一のミニゲームで遊べるしくみになっていても、ギャンブルは苦手という設定で賭博性のあるものではない。利用者の代わりに数字を選ばせてくじを当てるようなものも、曖昧に拒否するしくみになっている。

ただこれは、日笠が公共性を保つために取り入れているもので、人間になった今のリリには当てはまらないのか、初めての体験に声を上げて楽しんでいる。

「ギャンブル中毒にならないか心配ね……」

勢綱の頭上で、同じく見守る日笠が呟いた。

同じ場所で観察していても店員に怪しまれるだけなので、日笠の提案で自分達もメダルを購入して、他の離れた筐体でゲームに勤しむ。ちびちびと小額でプレーするだけなので枚数も増えることなく、いろんな種類のメダルゲームを楽しむリリ達の様子を眺められる。

——はずが、入鹿部長がポーカーの筐体でロイヤルストレートフラッシュを炸裂させて、大量のメダルをゲットしていた。その様子が気になったのか、リリもポーカーをやるうと流河を誘う。トランプには馴染みがあるからだろう。

「なにやってるんですか部長ーっ!」

リリ達が筐体を移動する合間に、三人は慌ててメダルをかき集めてカウンターへ預けに持っていく。そんな勢綱達をよそに、リリと流河はポーカーに夢中だった。

「むむむむ……これが最後のメダル」

眉間にかざしたメダルに念をこめて、卓上のディーラーと対決する。

結果はワンペア対フルハウスで、連敗続きのリリは勝負卓の上につ伏した。

「りゅーちゃん、あたしってポーカーの才能ないのかなあ……」

「ま、こんな日もあるって。ジュース買ってくるから、少し休んで」

最初は調子良かったものの、あつという間にオケラになってしまったリリは、恨めしそうにポーカーの卓を見つめている。ギャンブルの才能はないのかもしれない。

その様子を眺める勢綱は不憫に思っても、ここで飛び出すわけにもいかない。

日笠も同じように唇を噛み締めていると、リリの足元にメダルが一枚床を転がっていった。「？ メダル……？」

履いていたブーツに当たったメダルに気づいて、怪訝そうにそれを拾う。周囲を見回しているのに、三人は鏡餅状態で慌てて頭を引っこめた。勢綱の顔の下で、サングラスを外した入鹿部長が得意げに舌を出している。どうやら先ほど預ける時に一枚だけ抜き取っていたようだ。

「神さま、ありがとーっ！」

リリは声に出してお礼を言うと、もう一度メダルに念をこめて、ポーカーを始める。

ちようと両手にジュースを抱えた流河が戻ってきたところで、リリが椅子から飛び上がって両手をバンザイした。

「やったー、フルハウス！ メダル五枚に増えたよー！」

「あれ、まだメダル残ってた？」

首を傾げていた流河は、喜んでいるリリを見て、はじける笑顔を見せている。

「はい。あれ、もうやらないの？」

ジュースを手渡した流河がリリに尋ねると、首を横に振る。

「ちよūd五枚あるし、部員みんなの分！ はいこれ、りゅーちゃんの」

そう言うとりりは手にしたメダルの一枚を、流河に渡した。

「くくくっ！ 粋だねりりちゃん。ありがと、大事にするぜ」

喜びのあまり流河は肩を震わせると、握り締めたメダルをズボンのポケットにしまった。

ジュースを飲み終えるまでメダルゲームの感想で雑談した後、二人は階下へ降りる。上の階にあるビデオゲームのコーナーには目もくれなかった。

少し間を置いて、三人も一階に移動すると、リリはUFOキャッチャーの景品に夢中になっていた。巨大なぬいぐるみの入った筐体のガラスに、ほっぺをくっつけている。

「りゅーちゃん、あれほしい〜」

「ああいうの難易度高いからなあ。オレも女子のつき合いでたまにやるくらいだし……りりちゃん、あっちのにしない？ まずは現物狙いでいいこ」

「えーっ。あ、でもこっちのもカワイイ！ りゅーちゃん、がんばってー」

残念がつっていたものの、隣の筐体に入った、手のひらより一回り大きいぬいぐるみに、すぐ興味が移る。こちらは積まれたぬいぐるみの山から取るタイプなので、やりがいも大きい。

ワンコインで六回分、流河とリリが交互にプレーする。全部失敗して、次の七回目、流河が目当てのあざらしのぬいぐるみを山の上から転がすと、ポケットの輪に向かって落ちていく。

しかし縁部分に当たって大きく跳ねると、筐体の隅に乗って固定されてしまった。

「あく、引っかかっちゃったー！ 落ちてこないよ〜」

「揺らしちゃダメだって、ちよūtと店員呼んでくるわ」

泣きそうになるリリを置いて、流河が慌てて店員を呼びに行く。ちよūd勢綱達の方へ走っ

てきたので、三人は見つからないように急いで隣の通路へ移動した。

流河が店員に事情を説明すると、プライズ筐体の鍵を開けて、ぬいぐるみを穴の中に落とすしてくれる。完全にキャッチャーが届かない位置に挟まってしまっていたので、取ったのと同じ扱いにしてもらえた。

「ありがとうございます！ きゃ〜カワイイ〜。 よし、君の名前はごくつぶし☆」

だらけた感じで寝そべる姿から、リリはとっさに思い浮かんだ単語で名づけたようだ。

「よし、じゃあもう一個取りますか、次こそ自分達の力で」

残りの五回で、今度はメスのラッコを狙う。こちらはうまくフックに引っ掛けやすい配置だからか、最後にリリが挑戦したところでうまく掴むことができて、見事にゲットした。

「ふわ〜もふもふ〜、ラッコちゃん気持ちいい〜ずっとすりすりしてたい〜」

プライズ商品とは言え、ぬいぐるみの肌触りを直接体感するのは初めてなのか、リリは無邪気に興奮している。その姿はA Iアプリの時よりも、何倍もかわいい。

隣で流河は顔を真っ赤にして、喜ぶリリを見つめていた。

「よし、じゃあ次はあれやろっ！ あのでっかい羽のついたペンギン！」

「アレ、取れっかなあ…持ち運ぶのもデカすぎるし、専門ショップ行けば売ってるかも」

「ダメ？」

流河の前でリリは少し屈んで、上目遣いにおねだりする。

「しょ、しょ〜がね〜な。五百円だけやってみて、ダメなら後でショップ行こーぜ」

簡単に陥落した流河は、息巻いて大型プライズに挑戦し始めた。

「日笠さんの造った子、完全にあざとかわいい男殺しの娘になってますよ」

「後でキツク言っておかないと、調子に乗ってしまいそうで怖いわね……」

丁寧語で感想を述べる勢綱と、完全に妹を見る目でハラハラしている日笠。二人の心境なんて露知らず、流河はリリの応援を背に、高難度のプライズに挑んで玉砕していた。

倍の金額を使ったものやっぱ取れず、流河達はゲームセンターから引き上げる。背中を丸めて悔しがっている流河とは対照的に、リリはぬいぐるみ二つを抱きかかえて幸せそうだ。

「あ、これやりたい！」

次の目的地へ向かう途中、別のビルに入ったゲームセンターの入口付近に置いてある、太鼓のリズムゲームの前でリリが足を止める。勢綱達も慌てて近くの店角に隠れた。

「これぐらいならリリちゃんにもできるかもな。じゃあまずはお手本見せるぜ」

流河は上着の袖をパーカーごとまくって、備え付けのバチを両手に握り締める。

難易度の低い、知っている曲を適当にチョイスすると、真剣な顔で太鼓を叩き始めた。

「砥水くんってああいうの得意なのかしら」

「リズム感はんまりないかも。でもあの手のゲームはスマホでたまに遊んだりするよ」

ノーミスとはいかないまでも高得点で一曲乗り切ると、流河は大きく息を吐いた。

「ふー、こーゆーのって女子とのつき合いでたまにやるけど、結構汗かくなー。じゃ、次リリちゃんやってみ。難易度一番低いの選んだげる」

「え？ わたし？ 太鼓叩くの初めてだからドキドキするなあ……」

笑顔でバチを手渡されて、リリは戸惑い気味だ。

試しに力いっぱいバチを振り下ろすと、反動の強さで思わず後ろにのけぞってしまふ。

「もっと力抜いて。……それじゃ抜きすぎ。その……後ろでサポートするわ」

リリの力加減がわからないまま、曲選択の時間切れになってしまった。流河は顔を赤らめて後ろからリリの両腕を握ると、画面上に流れるマークに合わせてタイミングよく腕を動かす。

「こ、こう？ コツがわかってきた、わかってきたよー」

他人に自分の腕を動かされて始めは困惑していたリリも、曲の途中で加減とタイミングの取り方を掴めて、終盤は流河のサポートなしで叩けるようになった。無事一曲をやり遂げる。

「やったークリアできたよー、りゅーちゃんのおかげ！」

「ちよつ、人前で抱きつくのはやめやめっ」

満面の笑みで両手を回してくるリリに、流河は本気で恥ずかしがる。遠目で様子を見ている日笠は、親指の爪を噛んで黒いオーラを全身から放っていた。

もう一曲、今度はサポートなしでリリにプレーさせた後、次は二人同時に並んで叩く。

難易度の低い曲を選ぶと、リリはあっさりパーフェクトを叩き出した。

「すげーじゃん！ 次も同じレベルでいっとく？」

二曲目で流河が何度か叩き逃しているのをよそに、またリリはノーミスでクリアしていた。

「これたのしー！ 体が勝手にリズムに合わせて動くよー」

「よーし、じゃあちよつと難易度上げてオレもガチで行くし」

さすがに初プレイの女子に負けるようじゃ男がすたと、流河は二段階レベルを上げる。

このゲームは二人プレイだと、片方がミス続きでも一曲通してプレーできるので、これぐらいはアリだと流河は心の中でリリに謝った。

「やったー！ かんぺきー☆」

しかしそんな考えも裏腹に、リリはまたしてもパーフェクトで初見の曲を乗り切った。

「ちよつとリリちゃんスゴくない？ 知らない曲でそんなに叩けるものなのん？」

点数で負けた流河が、驚きと悔しさの入り混じった顔でリリを見ている。

「ベースとドラムのリズムに合わせて腕を振り下ろすだけじゃない？ どこが難しいの？」

当然のことだろうと、首を傾げるリリ。普通の人間とは物の考え方が違うのだろう。

「よ、よーし！ そこまで言うならもう一回やろう！ オレもプライド賭けるし」

格好いいところを見せるはずなのに、立場が逆転した流河は。パーカーを脱いだ。Yシャツ姿でコインを投入すると、自分が半分の確率でクリアできる曲を選ぶ。

気づくと通行人が足を止めて、美男美女の二人のプレーする姿を眺め出していた。

一曲終わる頃には二人の姿が人だかりに隠れて、勢網達からは見えなくなってしまった。仕方なくその後ろまで近づくと、人の隙間から、肩で呼吸している真顔の流河と、四連続パーフェクトではしゃぐリリの姿が見えた。周囲からちらほら拍手が起る。

「つ、次はこの曲！」

ムキになった流河は、クリア確率三割を切る高難度の曲を選んだ。

プレー中の表情は鬼気迫るほど真剣で、笑顔で太鼓を叩くリリとは大違いだ。

そして曲の途中でついていけず轟沈した流河をよそに、リリはまたノーマスでクリアした。

「ありがとーありがとー。えへへ、照れちゃうなー」

周囲のギャラリーから拍手をもらってリリはもじもじしている。失敗した流河はへこみきつた顔で次の曲を選んでいた。

「もつと難しいのでもいいよー」

「あんまムリしないでいいからね、リリちゃん……」

次は更に難易度の高い、流河が一度も成功したことのない曲だ。へーきへーきとイントロの時点で笑っていたリリも、テンポが速いこの曲は細かく叩くのに苦労するようで、真剣な表情になっていた。普段見せない凍々しい顔つきに、流河も周囲のギャラリーも見惚れている。

終盤までノーマスで叩いて、難所のCパート部分を乗り切った時にはギャラリーから驚きの声が沸き起こっていた。

「あ、あれ？」

しかしそこで腕がついていかなかったのか、連打の箇所でタイミングがずれ始める。一度崩れると体力切れもあってか、なし崩しにミスしてサビの最後で終わってしまった。

落胆の声が起こる中で、リリはその場でぺたんこ腰を落とす。

「もーだめー、腕が動かないよお。どーしてー？」

「機械と違って人間の体は、疲れが溜まってくるからな。そこが面白いんだけどさ」

流河が手を差し出すと、その手を掴んでリリが立ち上がる。ギャラリーからは健闘を称える拍手が送られていた。

「うまくいかないもんだねー。ずっと簡単だと思ってたのに」

「今のリリちゃんは体力もあんまりないし、やりこんだら最後のも完璧に叩けるって」

笑顔で手を振ってその場から離れる二人。囲んでいたギャラリー達も楽しそうに感想を言い合いながら、その場から散開していく。

「変な先入観がないから、吸収力も普通の人間の段違いのようね……」

リリの背中を目で追う日笠が、真剣な眼差しで感心していた。

その後、先を行く二人は大きなフィギュアショップの入ったビルに向かう。

一通り眺めた後、流河は掘り出し物の美少女フィギュアを購入した。先ほどのプライズ景品で取れなかったペンギンのぬいぐるみも、他の店で陳列されていたので無事手に入れた。

正午を回ったところで、オープンテラスのあるケbabサンド屋で二人は昼食を摂る。

勢綱達二人は真向かいの、テラスが二階にあるコーヒーショップから様子を見ていた。

「このぬいぐるみおつきいね。部屋のどこに飾ろっかなー」

リリは楽しそうに、隣の席に置いたペンギンのぬいぐるみの羽をばたばたと動かしている。

向かいの席でレシートの値段を見直して、苦笑いを浮かべる流河。それでもリリが喜んでい
る姿に、満足した笑みを見せていた。

「いただきまーす♪ わっ、これおいしー！　じゅわーって出てるよ、じゅわーって！」

到着したケbabにかぶりついたリリが、肉汁に驚いてはしゃぐ。着ている服に汁が飛びそう
なので、流河は店員に紙エプロンをもらって、顔を赤くしながらリリにつけてやった。

「みんな美味しいもの食べすぎだよ。人間になってから美味しいものしか食べてないよ」

「リリちゃんって苦手なものあったっけ？　ああ、きゅうりが苦手なんだっけか」

話しながら、流河がAIPリの設定を思い出す。ピクルスや漬物みたいに加工したものは
大丈夫で、生は大の苦手でサラダでもきゅうりだけは残す、変なこだわり具合だ。

「こつちに来てからまだ食べたことないけど、口にしたら多分吐くと思う……」

「そこまでのね……まあ、そばにいたらオレが代わりに食ってやるよ。でも納豆は任せた」

「えー、わたしも納豆はムリかも……食わず嫌いだけけど」

しばらく食べ物の好き嫌いで二人の話題が弾む。

「日笠さんも、きゅうりが無理なんだっけ」

遠くで話を聞いていた勢綱が日笠に問いかけると、首を横に振った。

「私が苦手なのはゴーヤーとかピーマンの苦いウリ系。あとは粘つくものが嫌いね——とろろ
とか、オクラとか……私の顔になにかついてる？」

「てつきり食べ物の好き嫌いも、同じにしてあるのかと思ってた」

「何もかも同じにしなければいけない決まりはないわ。利き腕や利き足だって逆だもの」

昨年秋にリリのバージョンアップで、モーションを増やすために素体の日笠がセンサーを
装着してデータを採取する際、勢綱も手伝っていた。空間認識能力には男女の差があると言わ
れているので、日笠の場合だと反転の方が理解しやすいらしいのも、合点がいく。

「二人とも、お昼ごはん」

話しこんでいた勢綱達の後ろから、トレーを手にした入鹿部長がぬつと現れた。前触れもな
くいきなり話しかけてくるので、心臓に悪い時がある。

トレーに様々な種類のサンドイッチが乗っている。どれか二つを選べ、ということらしい。

「あ、ありがとうございます……」

この店に入る時に勢綱はドリンクしか頼んでいなかった。

日笠はハムサンド、勢綱はツナサンドを選ぶ。残りは全て入鹿部長の胃に収められた。

よく食べよく眠る、だから入鹿部長は自分より背丈が大きいのだろうと勢綱は納得した。

食事を摂りながら視線を向かいの店に戻すと、食べ終わった二人が談笑を続けている。

「前から探してたフィギュア見つけれられてよかったね。いつも言ってたもん」

「あー、ネットでも手に入らなくて無理だと思ってたんだけどなあ。店頭のキャンセル出たのがタイミングよく並んでたっぽい」

「でも見つけた時悩んでたよね？ 今日観てたのはプラモデルばかりだし」

「女の子とのデートの最中に自分の欲しいモン手に入れて、サイフ空になったら笑いものでしょー……生身のリリちゃん連れて、美少女フィギュア物色するのなんだし」

「そう？ りゅーちゃんがいつもやってることだし、わたしは気にしないよ？」

「オレがするんだって。『連れてくるこの子、こーゆーの好きなんだな』って周りから思われちゃうと、リリちゃんにも迷惑かかるし」

「わたしなら問題ないよー。りゅーちゃんがガマンしてるの見てるとこっちが気になるよ？」

「その、今のリリちゃんは人間だからさ……それに『A I アプリの子にそっくりじゃね？』っていうヒソヒソ声も聞こえてくるし。ワニの髪留めつけてるせいもあるけどさ」

「学校でも街中でもわたしの耳にも入ってくるけど、『はーい、元A I アプリの架橋リリです☆』って自分から名乗ったらどうなるか、ちよつとドキドキするね！」

「部員のオレ達が後々大変になるだけだからやめて……」

三次元の女の子相手だと、流河も気苦労が多いようだ。二次元に傾倒するのもなんとなくわかる気がして、勢綱は同情した。かく言う佳月勢綱も彼女なし暦11年齢ではあるのだけど。

昼食兼休憩後、リリ達は次の目的地へ電車で向うために駅へ戻る。

二つ隣の駅で降りて、二人が抱えていた大きいペンギンとラッコのぬいぐるみを構内のロッカーに預ける。あざらしのごくつぶしは気に入ったのか、リリが胸元で抱きかかえていた。

先ほどの駅とは別の路線が集中する街で、西には動物園や博物館を備えた緑の多い公園がある。東には南北に長く伸びた大きな商店街があつて、さらにその先に歩くと歴史のある神社や寺の密集する観光地に辿り着く。

「オレもあまりこの街知らねーんだよなー。他の子との遊び約束で降りるくらいだし」

「ムリしてない？」

「全然！ オレも一度は観たいってトコもたくさんあるし、いい機会だぜ」

リリに心配されて、流河は笑って手を振る。近場に観光スポットが多いと、かえって特別な機会にならないと足を運ばないものだと、勢綱もその気持ちはよくわかる。

「ショッピングと公園、どっち先にする？」

「あ、わたし動物園いきたい！」

駅構内で頒布してあつた観光パンフレットを覗きこんでいたリリが、元氣よく挙手する。

「もう昼回ってるしなあ。閉園時間も早いし、今から行くとあまり観られないかもなー。行くと決めてれば朝の時点でこっち来てたけど」

「そんなあー。生で動物観たいよー、ゾウさんとかパンダさんとか」

「それなら別の日に部員みんなで行くのがいいんじゃないかね？ そっちの方が絶対楽しいし」

「うー。でもそうだね、他にも観たいのたくさんあるもん。ごめんねりゅーちん」

「いいっていいって。うっし、行こっか。まずはあっちの繁華街からかなー」

「流河は微笑み返すと、リリを連れて駅前百貨店の方角へ向かう。」

「ここは人が多いから、見失わないようにね」

日笠が勢綱達に注意しておく。先ほどの街も人は多かったものの、道が広くて午前中だったので追跡は安易だった。この駅周辺は休日だと、どこもかしこも道行く人が多い。

観光地と繁華街が重なっているせいもあって、外国人観光客も多く、賑わっている。

リリの淡い髪色はこの街だと通行人にやや紛れ易い。苦勞しつつ三人は尾行を続けた。

百貨店の中で夏物の衣服を選んだり、家電量販店で初めてのマッサージ機を体験したり、パンフに書かれていた手作り用品の店を回るコースを辿って、カバンや小物入れを購入したり。

「こりゃ夏はバイトしなきゃだわー……」

商店街に向かう途中、プレゼント攻勢で財布が軽くなった流河がまいった顔で呟いた。

「無理して買ってくれなくてもいいんだよ？ 聖石にお金もらってるし」

「プライドの問題だつて。こうやってリリちゃんに直接プレゼントあげられるのは嬉しいし。」

「そりゃ、アプリの中と違ってリアルマネーが飛んでいくけど」

「ありがとー♪ でも、他人行儀になられるよりはこれまでも同じ接し方をしてくれた方が、

リリは嬉しいかも」

「……ま、こっちもリリちゃんと普段通りに接するのはなかなか難しくてさ」

流河は足を止めると、頭を掻いて困った表情を浮かべる。

「でも三次元の女の子にはプレゼントしねー主義なんだ。その、他の女の子との兼ね合いもあるし、誰かとき合うなんて全然考えてねーし。こんな顔だからこっちにその気がなくても声かけられるし。適当に遊びに行つて、みんなに喜んでもらえるのが一番ってゆーか。誰も傷つかねーつてのが理想ってゆーか……」

「でも、わたしにはいいんだ？」

「そりゃリリちゃんはオレにとつて特別な存在だから！ 二次元でも同じでしょ」

意地悪っぽく尋ねるリリに、流河が辛気臭さを笑い飛ばしてニカッと歯を見せる。

「じゃあわたしも、りゅーちんの特別になれるように頑張らなきゃいけないね」

その言葉がクリティカルヒットしたのか、流河は大げさに胸を押さえてよろめいた。

「ま、まあ、リリちゃんはみんなの特別でいいって。だからみんな一緒にいるんだし」

顔を真っ赤にして照れ笑いを見せると、流河は恥ずかしそうに大股で先を行く。

「さ、行こうぜ。まだリリちゃんに見せてないものがたくさんあるし」

「うんっ！」

リリは大きく頷くと、小走りで流河の後をついていった。

二人のそんな様子を遠巻きに観察していた日笠が、ぼつりと漏らす。

「砥水くんにも色々悩みがあるものね」

「昔っから苦労してるんだよあいつはね。なまじ顔はいいのに生真面目だから、三次元の女の子と恋愛できないんだ」

勢綱は遠い目をして、流河の背中を見送る。

「昔一度、中学の時に、無理矢理流河にダブルデートに誘われたことがあって。帰り道で物凄く謝られたっけ。クラスメイトの男子に女の子紹介しようとしても、あのルックスで全部持つていっちゃって軋轢しか生まないから、学校内だと完全に女の子達のマスコットに徹してる」

「だから、部室にいるのが一番落ち着く。りゅーが、そう言ってた」

勢綱の話を継いで入鹿部長が語る。しばしの間、日笠は唇を真一文字に結んでなにか考えごとをしていた。そして、先を行く二人の背中を追う。

「だからと言って、あの子と砥水くんを恋人にさせるわけにはいかないわ」

世間知らずの妹を心配する姉そのものだ、と苦笑しつつ、勢綱は日笠の後についていった。

※

日曜日の商店街は、道行く通行人で埋まっていた。

魚介類や靴や衣類を扱う店先から、夕方の特売セールで客を呼びこむ声が響く。少し歩けば人だかりで、狭くなった歩道を互いにぶつかりながら通行人達がすれ違う。

「ひとがおおいー！ なーがーさーれーるー」

「リリちゃん手え放すなよー、はぐれるからー！ クソっ、こんなに人が多いなんて」

遠くから、かすかにリリと流河の声が聞こえる。この人の数は勢綱も予想以上だ。

「ちようど毎年行われる神社祭の三が日で、最終日に当たってしまったようね。私もお祭には全然行かないから、すっかり忘れていたわ……」

日笠がスマホでこの人ごみの理由をネット検索で確認する。人の波に流されないよう、後ろで入鹿部長が日笠の体を支えていた。

普段辛い顔を見せない入鹿部長が眉を寄せているので、よつぽど人ごみが堪えるのだろうか。

東にある神社方面から祭の客がたくさん押し寄せて、渋滞を起こしている。

「あ、あれ？ どこ行った？」

商店街を半分ほど行ったところで、リリ達の姿が見えなくなった。背の高い入鹿部長がサングラスを外して周辺を見回す。目立つ髪色の後頭部を見つけたので、人ごみを掻き分ける。

しかしその背中になんとか追いつくと、人違いだった。外国人の女性で服も別物だ。

「やばい日笠さん、完全に見失った！」

「この人だからだからあまり遠くには行っていないはず。一旦広いところへ出ましよう」

焦る勢綱とは対照的に、日笠は冷静に対処して、渋滞を抜けるとテナントの入ったビル前に退避する。そしてスマホを取り出して確認すると、その顔色が一気に青ざめた。

「嘘、GPSに表示されない。昨日の夜渡す時に充電したから、電池切れはないはずなのに」「リリ、スリープとまちがえた？」

入鹿部長の発言で、勢綱は思い当たる節があった。

「それはあるかも……電源の切り方、うちの妹に訊いたんじゃないかな。絢星のやつも機械嫌いほとんど使わないから。スリープしないで直接電源切るし」

「まいったわね……砥水くと連絡は取れないかしら？」

日笠が口にするよりも早く、勢綱は自分のスマホを取り出すと、流河に電話する。

しかしこちらも電源を切っているのか、通話に出ない。

「通話オンにしてたら休日の子達から誘いの電話が入るかもしれないから切ってるって、そーいやあいつ前に言ってた」

休みの日は流河の方から電話をかけてくることはあっても、勢綱の方から連絡を取る手段は必ずメールなのだった。仕方がないのでリリと今どうしてるかと、メールを送っておく。

「でも、デートの最中にメール確認するような奴じゃないなあ、流河のやつ」

生真面目な性格がこうした時、裏目に出ることを計算に入れてなかった。

「どうしよう佳月くん。リリが砥水くんともはぐれていたら……!!」

悲壮な顔で詰め寄る日笠を、勢綱が落ち着かせる。

「安心して、それはないから。何か問題が起これたら流河の方からこっちに知らせてくるよ」

「そ、そうね。冷静さを欠いていたわ」

すぐ理解して、日笠はその場で深呼吸する。こんなにうるたえる姿は勢綱もあまり見ない。

「でもこの人ごみから見つけるのは……」

「公園。次に行く場所」

入鹿部長が端的に答える。今日のデートのルートで残るのはそこだけだったはずだ。

「ここで探すより、先に公園に行ってから、通行人に訊いてみたほうがいいかも。目立つし」

「そうね。でも公園と言っても凄く広いから、どこから探せばいいか……」

日笠の不安はもつともだ。しかしこれ以上ここに居ても、埒があかない。

空を見上げると、夕焼けに染まり始めている。

「日が暮れる前に見つけよう。先にデート終わって帰ってる可能性もあるけど」

勢綱達は商店街の人混みを切り抜けて、駅西側の公園へ向かった。

動物園も公園内に含まれているだけあって、大型の市民公園より一回り大きい。端から端ま

で一直線に歩くだけでも二、三十分はかかる。

夕方には動物園が閉園するので、そちらには行かないだろうと踏んで搜索する。

春には桜並木が一斉に咲き誇って花見客でごった返す区域も、新緑の季節になるとそれほどでもない。通行人に尋ねながら博物館方面に足を伸ばしてみたものの、成果はなかった。

「もしかして公園には来てないのかな。分担して探した方がいいかも」

気づけばすっかり夕日は沈んでいる。夏至が近づいてきているとは言え、あと一時間もすれば夜の帳が下りるだろう。

それぞれ別れて三十分ほど探し回っても、手がかりはない。勢綱は一旦集合地点に戻って、焦った顔の日笠と合流する。入鹿部長は池の方面を探して、まだ戻ってきていない。

二人で公園内の池へ向かいながら、勢綱はメールをチェックする。やはり返信はない。

「入鹿部長！ そっちはどうですか……って、なにしてるんですか」

大きな池のそばで、入鹿部長が背中を向けてしゃがみこんでいる。

勢綱達が駆け寄って後ろから覗きこむと、たくさんの野良猫が集まっていた。

「にやーにやーにやー、にや？ にやーにやー、にやにやにや」

猫達と鳴き声で会話している入鹿部長。

さながら猫の合唱団で、道行く人達も興味深い視線でその光景を眺めている。

「せつな、わかった」

しばしの猫とのやり取りの後、入鹿部長は立ち上がって振り返る。

「リリ達の場所。ここから一キロ南に離れた漫画喫茶」

「今の猫達との会話でわかったのかしら……」

変に感心していた日笠は我に返ると、スマホを取り出して地図のアプリを開く。

入鹿部長の言った近辺のビル内に、それらしき店舗があった。

「あ、ありがとうございます。急ごう！」

勢綱はすぐさま駆け出す。日笠達も猫に挨拶してから、後を追った。

目的のビルに到達する頃には、完全に日が暮れてしまっていた。

二階に入った漫画喫茶は、この地域だとかなり大きめの店舗のようだ。

三人はエレベーターを無視して階段を駆け上がると、入店する。結構小奇麗な作りで、カラ

オケルームに近い。受付カウンターに女性店員の姿を見つけると、一斉に詰め寄る。

「さつき若いイケメンとかわい子の子のペアが来ませんでしたか!? 友達なんですけど」

「女の子はワンピース姿で、あざらしのぬいぐるみを抱えています」

「は、はい。えつと……確かそれでしたら二一七号室になります」

勢綱達は走りながら店員に礼を言うと、オープン席を通り過ぎる。

番号順に部屋が左右両側に並んでいるので、目的の番号を容易く見つけられた。

「リリ！」

勢綱は引き戸を全力で開け放つと、日笠と室内に雪崩れこむ。

そこでは砥水流河が真剣な面持ちで、豪華なソファに座ってぐったりしている、赤い顔をし

た架橋リリのニーソックスを、今まさに脱がしているところだった。

「な、な……」

「アレ？ オマエら来てたの……」

「なにしてるのよあなたは——っ!!!!」

耳をつんざくほどの日笠聖石の大絶叫が、静かな店内に響き渡った。

※

「本当に申し訳ありませんでした……」

先ほどの漫画喫茶から少し離れた、公園そばのファミレス。

砥水流河は椅子の上に正座して、PC研の部員達に頭を下げていた。完全に額がテーブルにつくくらい頭を垂れている横で、リリは晩御飯のクリームパスタを食べている。

「すっかり体の調子もよくなったようね。顔色も戻っているわ」

「人の多さとおなか空いたダブルパンチでへろへろになってんだよ」

「ほら、食べながら喋らない」

日笠は腰を浮かせて、真向かいのリリの唇についているクリームを紙ナプキンで拭き取る。

「ずっと歩いてたから、空腹になるのも早かったんだろね」

「こんなにおなか空いたの生まれて初めてだよー！ 全然力出なくなるんだね……」

「元気になって良かった。人間になった悪影響だったら大問題だったもの」

ほっと胸を撫で下ろして、日笠はドリンクバーのアイステイーをストローで啜る。

「あんな人ごみの中で連れ回すから、疲労困憊になったんだぞ、流河」

「近くの神社で祭あるの、すっかり忘れてたんよ……甘く見えた、悪い」

沈んだ顔で謝る流河。勢綱達も同じく忘れていたので、怒れない。

「商店街の露店のベンチで少し休んだんだけどなー。リリちゃんの顔色が回復しないからゆっくり休める場所に移動しようと思ったんだよ」

「公園に向かったと思ったから、おかげで見つけるの大変だった」

「商店街からだちよっと離れてたし。漫喫で静かな個室借りて、それでもリリちゃんぐったりしたままだから、隣で様子見て。まさか腹空かしてるとはなー」

「リリの靴下脱がしているから、一体なにをするつもりなのかと思ったわ……」

個室の扉を開けた時のことを思い出して、日笠はそっぽを向いて顔を赤くする。

「調子悪そうだったから、なるべく肌につけるもの外した方がいかなかった」

リラックスさせるために裸足にさせるとい言いはわからなくもないと、勢綱は頷く。

「全部脱がせるつもりじゃなかったでしょうね……」

「ないない、それはねーし！ 最初からそんなつもりならホテルに行ったほうがいいだろ」

「どうか。リリに結構プレゼントしているみたいだし財布も軽くなったでしょう」

「それより漫画喫茶であんな大声出すなよ。店員にすげー怒られたろ」

疑り深い目を向け続けている日笠と、不貞腐れた顔で言い争う流河。

その合間に、入鹿部長の注文したジャンボハンバーグセットがやってくる。丁寧に食前の挨拶をしてから、勢いよく食べ始めるのを見て、リリも興味を示す。

「あ、わたしも同じの注文していいかな、リリ？」

「食べ過ぎたら動けなくなるわよ。でも、今日ぐらいは聞いてあげるわ。すいません」

去り行く店員に声をかけて、日笠は追加注文を頼んだ。自分の分はドリンクバーで十分のようだ。部室でパソコンに向かっている時も、ゼリー飲料で済ますことも多いくらい食が細い。

胸のサイズの違いはそこに表れているのだろうか、勢綱は思った。

「明日は筋肉痛になってそうね、あなたも私も」

そう言っただけで日笠はリリに微笑む。勢綱もこんなに朝から歩き通しなのは久しぶりだった。

「でも今日はゆーちゃんのおかげでとっても楽しかったよ！ この体だと外歩くのも感じ方が全然違って、人間でいるのがこんなに面白いものだって知らなかったな」

「そう言ってもらえるとオレも嬉しいぜ。今度みんなで動物園行こーな」

「動物園？ そう言えば今日は行かなかったのね」

「こっち着いた時にはもう昼回ってたからなー。ってそうだ！ ずっと後をつけてるなら教えるよ！ 全然気づかなかったわ」

「わたしもー。みんな変装してたからかなー。ひじりんのその服、似合ってるよねー」

「な、なにニヤニヤ見てるの。ちよっと、あなた達も同じ目を向けないで」

不意に自分の着ている服を褒められて、戸惑う日笠。普段から化粧つ気が少なくてリリとほぼ同じ外観なのだから、おめかしすれば街中でも目立つのは当然とも言える。

「あ、そうだ。これ、みんなにあげる」

パスタを食べ終わったところでリリがふと思いついて、懐から四枚のメダルを取り出す。

「メダルゲームで手に入れたんだー。一人一枚、お守りにしてね」

流河にはすでに渡してあるので、残る三人にそれぞれ渡すと、自分の分を懐にしまう。

どうみてもただのメダルなのにとっても特別な物に思えて、勢綱ははにかむのだった。

食事が終わるまで、今日のデートについて五人は談笑し続けた。

店を出ると完全に夜になっている。家路を急ぐ人達に混ざって、勢綱達も駅へ向かう。

「ロッカーに預けてあるリリちゃんのぬいぐるみ、回収しとかないとな」

入鹿部長におんぶされているリリに、流河が暖かい視線を向ける。晩御飯を食べておなか一杯になったリリは、人ごみに揉まれた疲れも噴き出してファミレスで眠りこけてしまった。

「ごめんなさい入鹿、悪いわね。リリをおぶってもらって」

「いい。せつなの家までおぶっていく」

札を言う日笠に、なんてことはないと言葉を返す。自分もたくさん食べていたのに、全く疲れも見せていない。体力は人一倍どころではなかった。

「流河、ありがとうな」

勢綱は前に行く女性陣の背中を眺めながら、隣を歩く流河に声をかけた。

「なんだよあらたまつて。オレはリリちゃんとデートしたかっただけだし」

「おかげでいい経験ができたんじゃないかな。さすがに街中歩くのは早すぎたのか、体力使い果たして寝ちゃってるけど。ここまでリリを満足させられるのはお前しかいないよ」

「まあ、オレは三次元の女性の扱いには慣れてっから、オマエとは違って」

流河は皮肉っぽく笑う。勢綱には耳が痛い話だ。

「——でも、違っかったな」

「なにが？」

「リリちゃんは、リリちゃんじゃなかったってこと。横にいるのはリリちゃんだけじゃさ。煙に巻いたような流河の言葉に、勢綱は首を傾げる。どこか悟ったようなその表情からは、なにを考えているのか、さっぱり読み取れなかった。

「そりゃ、アプリのリリと生身のリリは別物だろう」

「ま、そーだな。そーゆーこと。あーアプリのリリちゃんにも早く会いたいなー。さっさと日笠復帰させてくれねーかなー」

「アプリの件なら来週再稼働テストを行う予定。その際、砥水くん達にも手伝ってもらおうわ」
「まーかせて！」

名前が聞こえて振り返った日笠に、流河は自分の胸を反らしてドンと叩いてみせる。ほんの少しの間、見せていた真面目な表情は、どこかに消え去っていた。

少し気になったけれど、勢綱もそれ以上深く追及することはしなかった。

リリが人間になったことで、特別で実りある非日常の日々が、絶え間なく続いている。その中でずっとアプリのリリと同じ目線で見られるのか、大きな変化が訪れるのか、それは誰にもわからない。AIが人間として成長することで、得られるものと失うものがあるだろう。

できるならいつまでも自分の好きな架橋リリであってほしいと、願わずにいられなかった。熟睡中のリリに代わって腕に抱えているあざらしのぬいぐるみから、かすかにリリの使っている石鹸の香りがした。